

北米インディアンの生活 (2)

- 23 部族の伝承と習慣 -

エルシー・クルーズ・パーソンズ 編 著

神 徳 昭 甫 訳

Ⅳ 中西部の部族

Ⅳ-1 若き狼「まじない師の家」¹⁾に入る

1

「師匠の家で」

マチキヌー、すなわち^{トリプル・イーグル}恐ろしい鷲は夕方、床に葦草を敷き詰めた、紡錘小屋の中で居眠りをしていた。炉の火は燦っていたが、時折入口を覆う^{むしろ}蓆を揺らして入ってくる、気まぐれな隙間風によってたまさかの小さな炎をパッと吹き上げるときには、小屋の内部がかなりハッキリと照らし出された。このために中にある、いくつかの家財道具やら、テントの継ぎ目あたりの一番黴臭い部分までがよく見えた。

この紡錘形の小屋の中には、大きくて粗末な椅子が一つ、周囲の壁面に沿って隈なく延び広がっており、その上には熊皮の服が何着か置かれていた。またこの椅子は、二又に分かれた棒きれと床一面に堆高く、ばらまかれたホウセンカの枝によって支えられていた。

壁には、色付きのものとか、釣り人やあるいは、伝統的な花模様をあしらって織り上げられた葦草の蓆が、かなりの数吊してあった。恐ろしい鷲の頭上には、表面が煙でくすんだ水平の柱(梁)が数本架け渡されている。そこには蓆カヴァー、さらに、年古りてすっかり黒ずんだ瓢箪のガラガラ²⁾が何個か花綵で飾られ結び合わされて全体が卵形をした包み、それと戦闘用の棍棒がいくつか引っかけた。これらに加えて、異常な効き目を持つ道具や武器——戦いや狩りの際に用いられる神聖な包み物、すなわちお守り袋——もそこにぶら下げられており、その使い方とか、それに伴う諸々の規則などは、恐ろしい鷲自ら、断食のときに神々から教わったり、あるいは彼よりもっと幸運な他の人から高価な値段で買い取って憶えたものだった。というのも、恐ろしい鷲は戦^{いくさ}にかけては名うての指揮官であると同時に優れた狩人でも

あり、それにまた、五大湖および中西部中の、ほとんどすべての先住民のまじない師がなんらかの形で所属している、あのメテーク・ミテーク、「偉大なるまじない師会」での最大の人物であったからだ。

入口の覆いが静かに押し上げられて、狼犬^{フネム}が、こ走りに駆け込んできて火のそばに体を丸めたが、そのすぐあとを追うように、まず肩から薪の束がどさっと落とされ、ついで恐ろしい鷺の妻であるワバノミテミー、^{ドーンクーマン} 暁の女自身が、つまづくように小屋に入ってきてフーフー言いながらしゃがみこむと、瘤だらけの膝を床について、その焚き付け用の薪を曳きずり始めたのである。

物音に目が醒めた恐ろしい鷺は、体を伸ばし、あくびをした。それから頭上に手を伸ばして瓢箪のガラガラを一つ下ろすと、軽くそれを振り始めた。暁の女の方は、薪を曳きずりながら、側に置いてある樺の樹皮で作った箱を跳ねとばしてしまった。それは床の上をカタカタと音をたてて転がった。彼女は、浅い円形の穴の中（炉）で燃えている火の勢いを強めながら、まだ熱い燃え殻の中に、大きく丸く深い、底の先が尖っている、褐色の土製の薬罐を置くと、素早く捻じめるようにしてそれを灰の中に押し込んだ。次にこの薬罐の中に樺の樹皮の桶から水を注いで、チンチンと音を立てて水が沸騰し始めたころ、野生の米や薫製肉、それに乾燥させた木の実などを大量に加え、かなり手の込んだ作りの木製の匙で掻き回した。

ヒュー、ヒューときまぐれな音しか出さなかった恐ろしい鷺のガラガラは、どうやらすっきりとした澄んだ音色を奏で始めた。それは、夜のざわめきであり、森を通る小川のせせらぎを歌った曲のようだった。また、それは、小石まじりの川底を駆ける瀬音のように高まったかと思うと、深い水を堪えた淵に落ちる小さな滝のように低く、単調な音へと変わった。

それから突然、恐ろしい鷺は声を張り上げ唱い出した。その歌の内容は、未熟な若者には何の意味もないものだったが、神々の力を祈願するのに効力あり、また松の森と同じくらい古い歌でもあったのだ。

「ニ マニティトック ヘワトウクク ケ ニ アミナム」

（おゝ、我らが神様方よ、汝を^{おろが}拝み願い奉る！）

「あら、あなた」うずくまって料理していた暁の女は叫んだ。「なぜそんなに神聖な歌を今頃唱うのですか？川に氷が結び、雪が大地を一面に覆うとき、マニトウス³⁾の歌を稽古する必要はありません。春、新しい命が草の刃とともに伸び始める、そのときにこそ、記憶は蘇らせるべきで、神々が熊のように眠っている今ではありませんよ。」

「しっ、静かに！古女房のおまえにも分からないことがあるのだよ。今だってわたらの前に諸先輩方や仲間たちが踏み固めた、この道を究めようとやってくる人がいるんだよ。ほら、聞

こえるだろう。」

家の中は、真冬のウイスコンシンの森の深い静寂とともに、しんと鎮まり返った。そのときサクサク、ギシギシと厚い雪の路面を踏みしめる雪靴の近づく音が聞こえてきた。

「ヌハウー、暁の女よ！この火の向こう側に客人のための席を用意し、毛皮の膝掛けを広げるのだ。スープ皿を並べなさい！わしらの部族の誰かが、このうちを訪問しようと望んでいるのだから。」

入口の前で物音は止んだ。恐ろしい鷺は火の上に屈み込んで、石製のパイプに詰めたタバコを熱い燃え殻の上に押し付け、それから客にどうぞ、お入り、と呼びかけた。「ヨホー！」と朗らかな返事が戻ってくると、背が高く、色浅黒い戦士——カワウソの毛皮で作った細い帯を額の周りに巻いている以外は無帽だった——が、ひょいと頭をすくめて中に入ると、無言のまま炉端の左に周り、客用に空けた場所に腰を下ろし、膝掛けの上にあぐらをかいた。縫目を深く房で飾り、無地の青に染め上げた鹿皮のシャツを身に着け、柔らかい靴底を張ったモカシンの上にダラリと垂らした革製のすね当て、山嵐の針を染めて、優雅な花模様をあしらった美しい刺繍入りの革の前掛け、というのがこの若者の服装だった。武器のようなものは携帯していなかったが、その浅黒い両の頬には、赤い丸印が塗料で描かれているのが、火明りによってよくわかった。

新来の客人は、大きな木製の柄杓を使って湯気の出ているスープを飲んだあと、膝掛けの上でゆったりとくつろいだ。ついで先ほど、この家の主人が詰め、火を付けたばかりの長い赤い石の柄のついた煙管を気持ち好さそうにくゆらした。タバコとキニキニック⁴⁾の心地よい香りが小屋全体に行き渡ったころ、客人は語り始めた。名前はムエーゼ、若き狼^{リトル・ウルフ}といい、メノミニ族^{ウエイブ・クラン}の波一門の出であること、ミシガン湖のグリーン湾のほとりのメトウク・アメーコ、大砂州村^{サ・グレート・サンド・バー}からはるばる旅してきたこと、若者たちが戦いの包を開いて、ソーク族^{バンド}征討の準備を始め、士気高揚の踊りを舞ったが、ソーク族が噂を耳にして南に逃げたこと、等々。最後に自分が属する分団に関する、たわいもない話題をとりとめもなく長々と喋って話を終えた。

暁の女が眠りに就き、小屋の煙出しから冬の夜空に星が見えるようになった時分、若き狼は不意に席を立った。彼は大きな袋包みを持って帰ってきて、それを恐ろしい鷺の足元にドサッと投げ出し、ふたたび部屋の中に腰を下ろした。

震える手で老人は革の結び目を解き、包みの中にしまい込まれた鹿革を開いた。目の前にズラリと並んだ、護符を見て、彼の赤い目は食欲そうにキラリと光った。

「ニマ ネカン！でかしたぞ！相棒！」彼は、叫んだ。

「こいつはすごい贈物だ！しかも全部数が揃っているぞ⁵⁾。四つの手斧、四つの槍、聖なる黄色の石（銅）で出来た四つの短剣、白い貝殻玉^{ワムバムシェル}で作った四つの帯、それに鹿革を鞆し、山嵐の針で刺繍した衣服四着と煙草が沢山入っている。この取り合わせには、きっと何か意味があ

るんだらうな？」

「爺いさまよ！あなたに出来ないことはありません。」客人は答えた。「それに引き換え、このわたしきたら、まったくけし粒みたいな存在です。貧しいうえに、わたしの名を知っている敵はほとんどおりません。しかし、わたしは、まじない師の家のご飯を食べたいのです。ちょうどわたしの以前に兄弟たちがやったように！」

「ヌハウ！わが孫よ！これから他の三人のまじない師の意見を聞いて彼らの同意を得にゃならん。おまえが望んでおることは、何でもないように思えるかもしれないが、しかし、これは、人の生命に関わることじゃ。このマニトウスの歌は子供だましみたいかもしれんが、しかし、これはよく効くぞ！わたしにはよくわかる。おまえは、むかし殺されて、それから生き返り、永遠の命を得なされたわしらの師父、メネブス⁹⁾さまの道を歩もうとしておるのであろう。よろしい！おまえはよくやった。午前中に招待の札と煙草を配り、尊師たちを呼び出そう。おまえが修行をいますぐにも開始出来るようにな。」

2

「教育期間」¹⁰⁾

日が沈んで一時間経った。小屋の奥には恐ろしい鷲と他に三人の老人が座り、左側には若き狼が控えていた。背後に、高価な贈物が山のように積まれていた。鹿の胎児の革を鞣して作った白い敷物の上には、聖なるトワカ、低音太鼓が置かれていた。シナノキを丹念にくり抜き、音の響きをよくするために、内部の空洞には指二つ分の深さほど水を盛って、外側は鞣した鹿革を湿らせて張りつけたものであった。太鼓の上には、アビの嘴の文様を彫り込んだ二本の撥がきちんと並んでいた。さらに、この太鼓の前には、煙草と、四つの瓢箪から作ったガラガラ——その木製の柄は何度も使用されてテカテカに光っており、相当前に作られたことが推測できた——を載せた丸太のカヌーを象る木製の鉢が置いてあった。青年が一人、火をおこして草やヒマラヤ杉を燃やしはじめると、やがて室内には香ばしい臭いが一面にたちこめた。暁の女と狼犬のアネムが戸口を守った。

両手を聖なる品物の上に伸ばして恐ろしい鷲老人は、祈願を始めた。まず伝説的な英雄でありまた、この「まじない師の家」の創始者でもあるメネブスに、さらに大霊に、太陽に、雷神鳥に、またマニトウス、すなわち善良な精霊（神々）に、そしてまた、地中や水、はたまた世界の暗黒部に潜むという邪悪な精霊にも、その出現を乞うた。それから彼らに捧げられた煙草を受取って、代わりにまじない師たちには、贈られた謝礼を譲るようにと、呪文を唱えたのである。

祈祷が終わると、紡錘小屋に集まった人は一斉に「ハウッ」という声を発した。恐ろしい鷲が「まじない師の家」発祥の歴史を語り聞かせているそのあいだ、三人の長老たちは、煙草を

ふかしながら聞いていた。手に撥を握りしめた恐ろしい鷲は、トン、トトーンと太鼓を四度敲き、澄んだ音色を響かせると、朗々として、また厳粛な調子で吟じ始めたが、ちょうど聖なる名を口にするくだりになると、急に囁くように声を潜めた。

彼は語った。絶えず延び広がっていく大海の上、天空に一人座した大霊メトウス・ヘトウークは、如何にこの一つの島（世界）が現れるのを願ったか、彼はなお、この島にわれらが祖母、大地として知られている一人の老婆が生まれるのを如何に望んだか。

彼は詠った。^{アワー・グランド・マザー}われらが祖母、^{ジ・アース}大地が如何にして身籠って、一人の娘を生んだか。人間に生まれ変わるのを望んだ四つの風が、如何にその娘の身体に入り、その胎内に双子を孕ませたか、そして、誕生の時至るや、その力余りにも巨大なるため、母の腹を蹴破り、以後永遠に産褥の婦人に死の苦しみを与えるようになったか、を。¹¹

「それから」と恐ろしい鷲は続けた「われらが祖母のこの大地は、バラバラに碎けた娘の遺体を掻き集め、裏返しにした木の鉢に入れて祈ったのだ。すると四日目、衰れに思った大霊が、その破片から一匹の小さな兎をお造りなされた。これすなわち、メトウス・ワブス、大きな兎で、世界をわれら人間の住処へと作り変えなされたメネブスさまに他ならぬ。」

「姿も形も人間とそっくりに創られた、この兎、成長すると人間と等し並に扱われ、友だちとしてまた弟として狼の子を与えられた。ところが、位が下の精霊たち、この措置を羨んで、弟の狼を殺してしまった。怒り狂ったメネブスは、立ち上がって戦った。すると大霊の子、メネブスにはかなわない。こうして恐れをなした悪霊たち、殺した弟を生き返らせた。じゃが、死して四日も過ぎたので、その身体からは、肉は落ち、腐臭はあたりに漂っていた。メネブスは悲しんで、弟の帰還を断わって、再びあの世へと送り返した。こうして今この狼は、あの天界の西の方、天の川の端にいて死者の国を統べている。死んで四日も経つと、人間は生き返れないのもこのためじゃ。」

「怒ったメネブスを宥めんと万策尽きた悪神たち、位格の高い神々にその仲裁を持ち込んだ。そこで、この高丘に長くて四角い、このまじない師の家が東西に面して建てられた。風の神がやってきて、青い空に白雲の屋根をかつちり取り付けた。小屋の支柱は、シナノキのつるに代わって、シューシューと生きた蛇を巻き付けて、棟上げ式の御馳走には、僅かばかりの青空でピリッと味を引き締めた。そこで神様方のお出ましじゃ。闇と寒さが住む北は、悪神たちの座る場所、南に上位の善神たち。さてそれからと神々は、着ている毛皮を脱ぎ捨てて、四方の壁掛けに吊り下げた。こうしてみんな元通り、元の姿の老人だ。」

「大霊の意見を聞いて神々は、満場一致で取り決めた。いじめは今後やらないから、まじない師の儀式を受けないか。永遠の命の秘密を人間にも分け与えるための身代りだ。これに対してメネブスは、カワウソが使いに來なきヤイヤだと言い、その進言を断わった。さて、ともかくもやってきたメネブスは、一度は死んだが、生き返り、立派に試練に打ち克ってこうして『ま

じない師の家」の開祖たる、その実力を示したのじゃ。」恐ろしい鷲の語りも終わりに近づいた。「メネブスが授かったその教えが、のちにわしら人間に伝わった。むかし土の中から生まれたと言い伝えられる、このメノミニ族のご先祖や、わしらの前にここに来た兄弟、同胞たちのやり方も、今のわしらのやり方も——儀式も祝詞もまじないも、みんな元のそのまんまだ」恐ろしい鷲は太鼓を四度鳴らして謡い終わった。「皆の衆！皆の衆！皆の衆！」

恐ろしい鷲が任務を終えると休憩になり、皆は煙草を喫い終えるまでくつろいだ。それから、別の年取ったプッシュウェオ、老師がその仕事を引き継いだ。メネブスを通じて人類に「まじない師の家」を授けた位格の高い神々とその低い神々の名前を、志願者に教えたのはこの人であった。「小屋の北側に座った悪霊には四つの格がある、と彼は口を切った。第一は、カワウソ、ミンク、^{マートン}貂、それといたちじゃ。第二に、熊、豹、狼、それに^{ホーンド・アウル}角ふくろう。第三は、ガラガラ蛇、^{ラトル・スネイク}平原ガラガラ蛇、^{ブレン・ラトル・スネイク}松蛇、それから^{バイン・スネイク}豚鼻蛇。四番目は、小さ目の鳥や動物たち。メネブスを怒らせなかった上位の神界の構成は、よく分からないが、^{ホッグ・ノーズ・スネイク}赤肩鷹とか^{レグ・ショルダー・ホーク}雀鷹とかのいろんな猛禽類からできておったようじゃ。これらが南側に鎮座して、昔は、人間のまじない師が、それぞれが持つまじない包の効能に応じて並んでおった。^{スバロー・ホーク}」¹²⁾

「これらの動物のその皮は、未知の万能薬を収める容器、つまりその袋として使われたようだ。しかし、昔、狼と深い関係があったという、犬や狐は小狡いし、その上悪食の習慣があるために、魔術との関係が噂され、彼らの皮の使用は、今は禁止されている。」

老師はそれから志願者に、これらの動物はみな、それぞれが分かち持つ、何か特別な能力を人間に与えてくれたことを話したのだ。例えば、いたちの狡猾さと獐猛さは、戦争や狩りのと^{スナッピン・タートル}きのために。また、恐らくは悪神の第四格に位する、かみつ^{スナッピン・タートル}き亀は長生きできるようにと、胸を切り裂かれてその後も、ずっと鼓動を続ける心臓を我らにくれたこと、等々を。なお、これらの動物たちは、志願者のための祝典歌をそれぞれ四つ持っており、それらはこの教育期間に別の師匠について習うことになった。

自分の意見では、と前置きしながらこの老師は、弟子にこう語った。この「まじない師の家」と儀式およびその制度は、遥か東方は^{サグレート・シー・ウエア・サード・ラングス}日出る海¹³⁾の、その近くの地方においても見られるようだ、なぜなら自分はその昔、ノットウエイ、つまりイロクオイの戦隊に出会ったけど、彼らの社会も同様に、動物たちから与えられた、あの不老不死の巫術を授ける儀式を執り行うのだと、そう話していたからだ。

暁の女が、蒸した飯と太った鹿の肉、髓入りの骨、干し葡萄を運んできて、小人数ながら一同揃っての宴会が始まった。もう、夜も遅い時刻だったが、誰も眠気を感じなかった。宴が果てて、その後は、三番目の長老が任務に就いた。

この人は、瓢箪のガラガラを一つ選り出して、時にこれを打ち鳴らし、また相の手に太鼓を打ちながら、まじない師の家の歌を若い狼に教えたのだ。動物の歌と同様に、開式の歌、閉式

の歌というのも幾つかあったが、聖なる数の四に合わせ、四つの歌を一組にして、それぞれが四度繰り返されたのである。これらの歌の内容は、いずれも実に曖昧で、意味のない音節をただ漠然と繰り返すことによって、たとえ盗み聞きされてもわからないようになっている。実際、その中のあるものは、大層古く、また一つ一つの言葉の意味を曇らしてあるために、仲間うちにもただ全体の意味が辛うじて伝わるという程のものである。だから、これらの歌はある秘儀の、呪術を行うために言葉で書かれた歌なのである。あるものなどは、他の部族の言葉、特にオジブウェイ語¹⁴⁾で書かれていて、すべて「ウイ ホホ ホ」(さもありなん)という不可解な語句で終わる。これらの歌には、題はあるにはあるが、これがまたまったく謎めいてもいるために、しばしばその歌詞やその意味も、全くうかがいしれないようなしろもので、また、たいていは、そこに詠われている動物たちや神々の名をハッキリ述べるのを避けており、その際だった特性か性質をほんのすこしだけ遠回しに、あるいは極めて漠然と述べているに過ぎないのである。

呪文打ち込み¹⁵⁾の歌というのもあったが、これは、あまりにも謎めいておりまた、神秘的であるために、志願者はその意味するところに関しては、全く五里霧中といった感があった。また、踊りや感謝、喜捨についても歌があった。

三番目の長老による歌の指導が終わった。志願者は、あとでこれらの歌を買って、それから時間をかけてじっくりと暗記する必要があるがあった。最後にまじない師としては、もっとも老練で年季の入った老師の指導が始まった。「わしのは、短いが大事なものじゃ。」と、この老人はそう言って、品物を幾つか志願者に見せた。それらは儀式に則って、しかるべき時と場所を定めてから手渡されることになっているのだ。これらの物の中には、カワウソの皮を鞣し、その二つの鼻孔には鷹の柔毛^{ヒコギ}を赤く染めた房飾りを詰め、その四つの肢と尻尾の裏側には、着色した山嵐の毛と針で伝統的な花模様を表す刺繍をその上に縫い込んだ藍染めの仔鹿の皮——それはぎざぎざの縁がついた長細い形のもの——で飾り立てたのがあった。これは新しいまじない師のお守り袋となる筈だった。このカワウソの胸のところに空けた穴から手を突っ込むと、この動物の左の前肢の皮を細工した小さな袋の中に、コネベミック、まじないの矢と呼ばれる小さな貝殻に触れた。これによってその袋の中に入っているあらゆる神聖な御物の霊が儀式の際は、このまじない師の家の兄弟、同胞の身体に「打ち込まれて」、伝わるのである。

このカワウソの皮は、まだ他に三つの魔除けを持っていた。すなわち聖なる青い顔料、これは大空の色を映している。淡水ハマグリの貝殻の入った包の中には、ある植物の種を有した謎めいた褐色の粉。さらにアピセッチカン、蘇生薬と呼ばれる植物の根をすり潰して水に浸した混合液である。

このハマグリの貝殻——古いが一種の聖杯とも見なされている——に例の粉や種が少量の水に混ぜられ、志願者に供せられる。この謎めいた種は、この「まじない師の家」のシンボ

ルとも考えられているもので、たとえ死者の道を通して天の川に赴いたとしても、志願者の胸の中にしまわれている筈である。蘇生薬とは、病気、あるいはまじないによって人の生命が「引き潮」になったときは、いつでも使用される強力な薬である。「従ってこれらは」と最後の老師が言った。「この世がある限り、われわれ先住民が手に入れ、使うことの出来るようにとメネブス様からわしらに下されたやり方であり、また神聖なる御物なのじゃ。」

こう言いながら彼が退席したのを潮に、一同は毛布をくるくるとその場に敷いて、紡錘小屋の煙穴から朝日が覗くまで眠りに就いたのである。

3

「参入式」¹⁶⁾

草木の芽の萌え出る季節となった。地上にまだ雪が残っている間に、孵ったばかりのふくろうの雛が、もう獲物を啄ばんでいた。耳障りな蛙の鳴き声が、沼地の方から鳴り響いてくる。イワナシの花が満開だった。

暖かい、日当りの良い丘の上に、数本の支柱を樹皮や葎草で覆っただけの細長い、丸屋根の小屋があった。それは東西に面していて、100 フィートは十分にあろうかと思われる奥行きに比して、その間口は20 フィートばかりの奇妙な形の建物だった。

ミテウィウィン、加盟儀式が始まって四日目の夕べのことだった。これまで三日三晩、恐ろしい鷲の率いる四人の師匠によって若き狼の教育が続いていた。それはすべて、この家の一方の端を仕切って作った部屋の中で若き狼に、身を清めるスエット・バス¹⁷⁾という儀式を受けさせ、また指導の謝礼として四組の高価な品物——衣類、礼服、武器、銅器具——を小屋の東端の棟木に吊させて、その奉納の仕方を教えるための準備だったのである。

日が沈むと、四人の老人と志願者が小屋に入り、その後から、既にこの会の会員である部族の男女が続いて入った。東側の入口から入った行列は、整列して北側に進み、ぐるっと一回りしてから戸口の右側に腰を下ろした。志願者はその西側、恐ろしい鷲の隣りに座った。

その夜はほとんど無言の指導が続いたが、明け方近く、この家の職員の一人が顔を東に向けて若き狼の前に立った。片手をまじない袋の中に押し込むと、神聖なハマグリの貝殻と種子の入っている粉を取り出し、それらを混ぜ合わせて飲物を作るや、「カワウソが持っているもの」という歌を唱った。

御柱に吊せし、小さき種

そはわが供えしものなれど

吊されしものは みな下に落ちてあるらん。¹⁸⁾

その歌を唱い終え、若き狼がその液体を飲み干すと、この職員は退き、入れ替わりにもう一人が進み出てまた別の歌を唱った。それが終わると屈みこんで烈しく咳込むと、貝殻を一つ吐き出した。それを掌に乗せて、呪文を唱え東西南北の方角に示したあと、若き娘にその貝を飲み込ませた。それは、永遠の象徴であり、また会員の記章として彼の体内に永久に残るために、というのである。これが終わるとまた別の人が出てきて四つの歌を唱い、聖なる青色の塗料で志願者の顔を彩色した。それから最後にもう一人の職員が、カワウソの皮とまじない袋を抱えて、志願者と老師たちの前に出、カワウソに関する四つの歌を唱いながら志願者の足元に置いた。そのうちでもっともよく知られている歌は、「ヨム ミテワケウ (この魔法の国)^{ソズ・メディスン・ランド}」というもので、実際はカワウソには何の関係もなかった。

さて老師たちは、志願者を先導して小屋の周りを四度ぐると回りながら創始者メネブスについて語った。いまやこの志願者がメネブスを体現しているのである。最後の一周は恐ろしい鷺が先頭に立ってこの家の西端の席までやってきて、そこに志願者を東の方向に向かって立たせた。さらに自分は志願者の後ろに立って彼の両肩を押さえた。

一同は、四方の壁の周囲に座り、固唾を飲んで何事かを待っている。森の中から聞こえてくる音を除いて、しんと静まり返った。最大の劇的瞬間がやってきたのだ。

若き狼の前に儀式を終えたばかりの四人の見習いが、彼に対面する形で東に集まった。最初の一人が両手にまじない袋を抱えて、自分の身体の前に胸の位置まで差し上げながら、太鼓の早い音に合わせて歌を唱った。^{シューティング・ザ・ニュー・メンバー}新入りを打つ¹⁹⁾という歌である。ところがである。例のあの「オウ ウェ ホ ホ ホ！」という聖なる呪文を叫んでまさにこの歌を唱い終えたばかりのこの人物、カワウソの頭を叩き、やにわに志願者の方に向かって脱兎のごとく突進したのだ。

原初の英雄の姿を再現した新会員に襲いかかった、この攻撃者は直前に来て急に立ち止まると、カワウソの剥製を頭上高く持ち上げながら、恭しく叫んだ。「ヤ ハ ハ ハ ハ！」このとき袋の中から発した呪力の精髓がおそらく志願者を打ちすえたためであろう、彼はちょっとよろめいたが、すぐに側の見習いの一人に支えられて身体の平衡を取り戻した。しかし、それから二度、三度とこの見習いのまじない師による「攻撃」を受け、そのたびに志願者はよろめくのだった。ところが四番目の攻撃は、非常に激しく真に迫ったもので、彼は地面に腹這いになったほどであった。最後の襲撃者が身を屈めて、この兄弟の背中にまじない袋を、今後は君のものだよ、とばかりに置いたとき、明らかに彼は気を失っていた。恐ろしい鷺の合図によって、四人の見習いは、うつ伏せになった志願者を助け起こして、あたかも「弾丸」を身体から取り除くがごとく軽く揺ると、彼は再びこの世に生き返ったのである。

それから先は爆発的な喜びの連続だった。ぐつぐつと沸騰している土鍋が持ち込まれて、熊や海亀、やまうずら、あひるなどの肉を煮込んでおいしいシチューやスープなどが料理され、会食が始まった。けたたましい笑い声や冗談、また邪気のない冷やかしかし声が部屋中に溢れ出し

た頃、もう最後の大鉢が片付けられ、食器類や食べ残しも運び出されて、突然、威勢のいい太鼓の音が鳴り初めた。これから踊りが始まるのである。一同がそれぞれ四つの歌を披露したあとに、全員参加の総踊りとは相成った。新しい兄弟を加えて会員総出で小屋をグルグルと周り、にぎやかな掛け声と同時に無差別に相手を打つ動作をする。また互いに負けまいと伸び上がりながら相手のまじない袋を狙ったりする。かと思うと、急に土間にうつ伏せに倒れたりするものもいた。この間ずっと大きな勇ましい歌声が続いていた。

我過ぎ越せり！我過ぎ越せり！
我はやむらおき酋長をしも過ぎ越せり！²⁰⁾

目には見えねど 汝 神様方
われらが元に来ましてともに舞えり！²¹⁾

すべてが終わったとき、ケソ、太陽は高く上り、すでにほぼ正午の位置にあった。四人のまじない師見習いは、棟木に吊した奉納の品を下ろして、まず四人の老師と、それからこの式典に参加した他の人々に分け与えた。一同は整列し唱和しながらやがて西の出口から外に出た。

汝 わがほらから同胞よ。われて掌にて汝らがこゝろ頭を撫でん。いや、ありがたきかな。²²⁾

若き狼は最後に残った仲間が、小屋を打ち壊すのを眺めていた。覆いが支柱からずり落ちると、こうして最後に残ったものも藪の中に消えて行った。

彼は、もう立派なミテオ、偉大なまじない師の会の一員なのだ。西はロッキーの麓まで、北は不毛の大地、南はアイオワ、オト²³⁾の地方、東はイロクオイの地方までも旅するだろう。そして同じ道、すくなくとも一つだけは同じ、その道を辿る同胞たちに出会えよう。彼は、堅固な意志と忠誠心——まじない師の家で最も大事な二つの美德——を示した。彼はまた、このメノミニ族が初めて地中から姿を現したその日から、部族に代々伝えられて今なおこの世に生きる、あの聖なる秘儀、参入式を見事に通過したのだった。

アラン・スキナー²⁴⁾

Ⅳ—2 ウィニベゴ²⁵⁾のシャーマン、雷雲の語りと祈り

わしは天から降りてきた聖人のサンダー・クラウド雷雲、今は第二の生を楽しんでいる。そのむかし、地上に争い事が満ちて、人がみな戦乱に明け暮れていたころ、わしは、人並優れた勇敢な戦士だった。だが、ある日、わしは戦で死いくさんでしまった。進軍の途中だったが、ふと何かにつまずいて地面

に倒れた、と思ったんだ。しかし、そのまま立ち上がって歩きながら、家路を目指して進んで行った。我が家に着くと、妻も子供たちもみなそこにいる。だけど、誰もわしの方を見ようともしないし、気にも留めない。妻に話しかけたって、わしという存在をまったく無視している。話しかけられているのに、気付いた様子がまったくない。すぐそこに立っているというのに、言葉は通ぜず、姿も見えないらしいのだ。「いったい、このわしはどうなったんだろう？」しばらくの間考えて、とうとうあることに思い当たった。「そうだ、たぶん、わしは死んでしまったんだ。」直ちに戦場に引き返し、倒れている自分の身体を発見して、やっと自分の死を確認したという具合。

それから先は、長かった。天の家に帰ろうと四年頑張っても駄目だった。やむなく地上に留まった。

あるときは、魚になって海で暮らしたよ。この魚の生活は人間よりも惨めだな。食べる物もない状態だったたびたびだから。でも、魚は、歌って踊っていつも楽しくやってるよ。

またあるときは、鳥にもなった。陽気のいい時分、鳥の生活は素晴らしい。でも寒くなれば、暮しは実につらいのだ。食物がなくなって、ひもじいときがしょっちゅうだし、それに寒さは身にこたえるよ。わしはよく近くに住む人間の村に舞い降りて、昼間はそこで過ごすことにした。連中、よく狩りをするが、そんなときにはいつだって、持ち帰った獲物の肉を少々棚の上から失敬したもんさ。

ところでこの村には悪餓鬼がいてな、わしらは、みんな恐れていた。わしら鳥族が恐がる武器でズドンと奴がやるたびに、わしらは、一斉に飛び立った。夜になると、巢に帰る。中味が空洞になった一本の木がわしらが帰る家だった。一番初めにわしが戻り、遅れて仲間たちが次々と入ってくれば、もうグューグューの寿司詰めだ。みんなの帰りを待ちながらじっとしているそのときも、もう寒くて寒くてたまらない、凍え死ぬほど寒いんだ。

また、あるときはバッファローにもなって、群れの中で暮らしたことがある。食べ物のないことや、寒いのは、それほど気にはならなかったが、獵師が来るのを四六時中、警戒せなならん。これは、ほんとにしんどいよ。

そこからわしは帰ったんだ。あの天にある、魂のふるさと、わが因って来たる本来の場所にな。ほら、あの高い空の上にまじない師の家があってさ、あそこからわしはやって来たんだ。

しばらく暮らした、この天の家でも、わしはやっぱり退屈になって、再び地上に戻りたくなった。天の家を取り仕切る、わしの祖父は猛反対さ。初めは絶対駄目だとな。何度も何度も繰り返して、やっと四度目に同意を得た。「よし、ほんとに行きたいならば、行くがよい。だがこれだけは言うておくぞ。断食するのを忘れるなよ。諸神に好意をもたれたら、地上で平和に暮らせるのだから。」

四年間の断食後は、第四天の神々さえも、わしが行くのを認めてくれたよ。みんながわしを

祝ってくれた。さらに10日食を絶ち20日、30日と繰り返すと、諸神はこぞって讃嘆しきりさ。地上を統べる神々さえも、だ。

さて、準備万端整うと、諸神、諸霊が集まってわしの周りで会議となった。この天地の中心、上天で合同会議が開かれたのだ。わしに貴重な助言を与えんと、みんながここに参列した。「今後おまえが何かをしても、必ずうまくいくだろう。」そう言いながら諸神たちは、わしの力を試すのさ。まず灰色熊の精霊が舞踏小屋²⁶⁾に呼び出され、その巨大な姿を現した。如何なる手段を用いても、決して傷つくことのない、不死身の熊と言われてた。

舞踏小屋に満員の諸霊、諸神が唱い出した。わしが地上で使う、そのはずの歌をみんなで唱い出したんだ。このあと、わしは暖炉に行くや、熱い燠^{おき}を取り出して片手の上に乘せたんだ。してから暖炉の周りをぐるぐる踊り「ワヒー」と一声叫ぶとともに、燠を握った片方の手を、もう一方の手で打ちすえた。すると不死身のはずの灰色熊が、弾かれたようにつんのめり、バツタリ前に倒れ伏し、腹這いになったまま動かない。その口からはドクドクと黒い血潮が流れ出た。

「熊はおまえに殺された。不死身の熊が殺された。今後は決して邪悪な奴がおまえの前を横切ったりはしない。」精霊たちは、また、こう言った。「おまえは今後何事もうまくいかないことはない。」彼らは赤いナイフを取り出して、殺した熊を引き裂くと、小屋の中央、その肉棚にこの熊の屍体を安置した。

ついでかれらは、この肉を黒い覆いで隠した後で、わしに向かってこう言った。「さあ、やってくれ。おまえの力をもう一度、わしらに示すときが来た。」そこでわしは二つのものを、笛と瓢箪²⁷⁾を注文したが、それらは、後で地上に降りてわしが使ったものだった。

そうしてわしは神聖なシャーマンの身分になったのだ。諸神や諸霊の見守る中で、死骸の周りを回りながら、ハーッと息を吹きかけた。再びグルリと回ったあとで、二度目に息を吹き込むと、みんなも揃って吹き込んだ。四たび息を吹き込んだとき、死体はむっくりと立ち上がり、熊から人へと早変わりさ、悠々然と立ち去った。

「ホー、みごとや みごと。死者をこの世に甦えらせた、あやつは真の聖人なるぞ。」諸神はわしを誉めそやし「なあ一孫よ、おまえの力は不滅だよ。たとえ、存在するものが何であれ、おまえは殺し、またそれを生き返らすことが出来るはず。まことにおまえは祝福された。」かれらは、わしにこう語ったのだ。

それから諸神は、天を統べる、このまじない師の家に黒石を置き、ふたたびわしの力を試したのだ。四たびわしが息を吹き掛けると、ついに石のまん中に穴が空き、わしの力は証明された。だから今後はもう、誰が苦しもうと、わしに息を吹き込まれさえすれば、その苦痛はなくなるだろう。どんな苦痛だっておんなじことさ。わしの息吹き²⁸⁾の聖なる力は諸神によって与えられたのだから。

三たびわしは試された。地上と地下をしろしめす、すべての神や精霊によってだ。腐った丸太の一本がわしの目の前に置かれたのさ。これに向かつて息を吹き、口から水を吐き出すと、丸太はひょっこり起き上がり、人間に化けて出て行った。

丸太に水を吹きかけて人に変えるこの術をわしは鰻から教わったんだ。広い海のど真ん^{なか}央、その一番深い底に住んでいる鰻の中の王様にな。わしに祝福をくれたのは、全身真っ白の鰻殿。だから水は思いのまま、どれだけ使っても尽きることはない。鰻はそう言ったのさ。

さあ、いよいよ、このわしは人間の住むこの地上で暮らすこととあいなった。人間たちは、何処かに集まって誰がわしを迎えるかを話し合ひで決めていた。このウィニベゴの地に舞い降りるや、直ちにわしは、あるテント小屋——会議で決まった家さ——に向かった。そこでわしは生れ変わったんだ。「小屋に入った」と思ったけれど、実は母の胎^{はら}の中だった。生まれたときのことなんかハッキリ記憶に残っているな。大きくなっても、このわしは決して断食を欠かさなかった。すると、神や精霊たちは、今度もこぞって感嘆しきり、ふたたび祝福を忘れなかった。こんなわけでこのわしは、今や神や霊さえ支配するシャーマンとして知られている。わしが言ったことは何だって、みなその通りになってきた。

ところであんたに貰ったこのタバコ、これは本当はわしのものではない。諸神、諸霊のものなんだ。カミ様方の身代りにタバコを受け取る、ただそのためにこのわしは、この地上に召されたんだ。ここに病の人がおり、わしはタバコを戴いた。タバコを戴くその代わり、病を治して長生きさせる、これがわしの役割である。

安心しなさい、患者さん、あんたの命は助かった。もう、これからは、出来るだけ気楽でゆっくりやりなさい。ただそれだけで丈夫で長生きできますとも。さあ、これからお供えしますから、よく聞いて、わしの言葉を信じるならば、きっと力が湧いて来ます。

おゝ、われらがカミイ、火のカミ様よ。

いまし ^{おろが} 汝を拝み、

この煙草、ここに捧げ奉るなり。

汝かつて約束せり。われ煙草を奉らば、

わが望みしかと聞き届けんと。

汝かつて約束せり、「わが頭^{こぶ}にその葉を載せよ」と。

汝われを祝いてそののちに、しかと言わざりしか、わが四日の断食の果てに。

病人^{やまうど}のただ長生^{ながろ}ふことのみを望みて汝に願ひ来たり。

この葉、汝のものなれば、四日を経ずして病たちまち休みてもとの健けき身^{かへ}に復し給へ。

もとの健けき身、われらと等しき身に復し給へ。

おゝ火よ、老いたる父よ。汝にこの煙草を捧げ奉る。いざ、これへ。

おゝ、汝、野牛のカミよ。汝の力、汝の活力を我に与へ給え！われ六日間の断食を行いしのち、汝の靈力を受け、この地の半ばは汝の家を訪なひたり。その姿真白き野牛、汝われを祝福せり。またその四つの異なる色を帯びる野牛とても同じなり。かのときの祝福をわれ今欲す。万のものに息を吹き込みて人と化せるその呪力を与へ賜え。その昔にわれに語りしことあり。「汝、何事をなすも、およそあたわざることなし」と。われ今それを欲す。されば汝に願いて言う、われに力を与へ賜え。民人来たりて、あまたの煙草を我に与へしものなれば。

おゝ、灰色熊よ。汝に煙草を捧げ奉る。

ボインティッド・ヒル
頂の尖れる丘と呼ばれしところ、舞踏場を司る精霊あり。そこに集ひし精霊こぞりてわれに祝福を与えて曰く「汝に手向かいしものはすべて汝に滅ぼされん。またその魂離れしものも汝が望むがままに、やがてその命復せざらんや。」機会は満ちぬ。わが同胞を救いて彼が命をこの世に留め置かんがことを切に願う。煙草の葉あまた賜ればなり。いざ、これに。われ彼岸にありしとき、汝の家に招かれたり。十日の食を断ちてのちに、汝が祝福を得たり。機会は満ちぬ。汝、彼のときの約束を今果たされんや。老いたる父よ。民人、汝に煙草を捧げてここに奉る、いざ。

おゝ、汝、大海原深き底に在す鰻よ。われ八日食を断ちしのちに汝もまた祝福せり。その息の力によりて、またその尽きることなき水によりて、われを祝福せり。病て苦しむ人あれば、その水もて癒す術をわれに授けんと、汝その折に約せしことを忘れしか。海原の水すべてわがものなりと。ここに命惜しみて長生へわたらんことを欲す人あり。われもまたそれを望む。かるがゆえに汝にかく語りぬ。わが口より出ずる水に汝が力を与へ賜へ。老いたる父よ。汝に煙草を捧げ奉る。いざ、これへ。

おゝ、汝、上天に在してまじない師が家を司る亀よ。七日の断食畢わりしのち、われを祝してわが霊を客人として招き賜いぬ。汝が宿には鋭き爪もてる鳥類あまた集いてありしが、そのなべてのものわれを祝して曰く「いかにその傷み大しとて、必ず汝そを取り除くことあたわざらんや。」しこうして汝われを『薬師』^{くすりし}と²⁸⁾呼び賜いぬ。「傷みを除くものの意」なり。いまわがもとに病て苦しむ人在ませり。汝がことば通り、われ薬師なりせば、またわれにおいておよそ為しあたわざることあらざれば、われに御加護賜らんことを。いざ、煙草をこれへ。

汝、蛇の家に属するものよ。汝、いと白きガラガラ蛇よ。四日の断食ののち、われを

祝せざりしか。こたびのような折ありせば、われを助けんと、しかと約束せり。汝、その音のすなる尾をわが瓢箪^{ひきご}として下し賜いぬ。汝、約束せり。この瓢箪^{もち}を^{もち}使いて、わが為すことおよそあたわざることこれなしと。かるがゆえに、われ煙草を捧げて願ひ奉る。われこの瓢箪^{おこ}を振らば、この病きし人の氣、再び熾りて長生へんことを。その命、彼が目前に開けんことを。そは汝が約し給ひしことぞ。老いたる父よ！

おゝ、汝ら、夜の精靈^{すだま}よ。九日の断食終わりしに、汝らもまたわれを祝ひて東^{ひんがし}の彼方に在す汝らの邑にわれを運べり。彼處^{かしこ}にて汝らわれに語りき。「われらが草木は聖^{きよ}し。奇しき驗^{しるし}もてり」と。さらにその藥種もてわれを祝ひ給ひき。いま汝らに望むことはこれなり。わが笛に清らなるいのちのもとを吹き込み給ひぬ。わが言葉に偽りなきことは汝らのよく知れるところなり。あまたのひと、わがもとに病を得て苦しむ人を運び来ぬ。いのち長生へんと願へればなり。われもまたそれを願ふ。かるがゆえに汝らに願ひ奉る。汝ら常にわが煙草を受け給ふことを約束せり。いざ、これに。老いたる父よ。

おゝ、汝、病^{もと}の源よ。汝に煙草を奉る。われ二日の断食畢へし折、汝のためにわが民人、病を得ることを知りぬ。されば、われ病臥せる人を救わんと欲せど、そはさしたる難事とも存じ候はず。かるがゆえに汝、病^{もと}の源よ、煙草を捧げ奉るなり。病人^{やまうと}を疾く癒し給わんか。汝われを祝ひし折に、約し給へればなり。

おゝ、汝、雷神鳥^{かみなり}よ。汝に煙草を奉る。汝われを祝福し、かつ約し給ひぬ。わが艱難の折は、必ず助け給はんと。ここに病^なみて永久の命を願う人在ませり。われもまた、さなるを希む。さればわれ汝に、その言葉の違はざることを請へり。おゝ、老いたる父よ。われを助け給へ。いざ、煙草をこれへ。

おゝ、汝、日輪^{ひるしほ}よ。汝に煙草を捧げん、いざ。われ五日の断食を畢へしとき、汝かく語りぬ。われにいと為し難きことあらば、必ずこれを助け給はんと。ここに病を得て長生へわたるを願うもの^な在りて、汝に捧げ奉る煙草を持ちて来にけり。汝、われを祝し給へればとて、わがもとにこれを持ち来りしものなり。

おゝ、汝、老いたる母よ。月よ。汝もまたわれを祝し給へり。わが力いや増しに増すを約し給ひぬ。ここにさる人長生ふを希みてわがもとに来たりぬ。汝^なが力を加えて、わが力を増し給へ。そはみな、彼の病人^{やまうと}ひとへに長生へんがためなり。老いたる母よ。いざ、煙草をこれに。

おゝ 老いたる母よ。大地よ。汝にも煙草を捧げ奉る。汝われを祝し、かつ約束し給ひぬ。一旦ことあらば、必ずわれを助け給はんと。汝がもとに生ひ茂れるいと奇しき効験もてる薬種、なべてわが手にて使ふことを許し給ひぬ。また曰く、わが試みることはなべてなし能わざることこれなしと。さればわが願いを認きて、汝その言葉をな違へそ。彼の病人のためにこれらが民びとのわれに求めしことを、われに代はりて果たし給へ。わが薬の効能をいや増しに増し給へ、老いたる母よ。

おゝ 汝、神々の長よ。汝またわれを祝して誓ひぬ。われに力を貸し給ふと。さればわれ煙草を捧げて汝に願ひ奉る。この病人の生き長らへんことを。よし彼が魂その体よりあくがれ出でんととも、心してな捕らへそ。かるがゆえに、われ汝に願ひ、かつ煙草を捧げ奉る。

おゝ 汝ら神様方よ。汝らになべて煙草を捧げ奉る。その昔にわれを祝ひ給ひし汝らのすべてに。

ポール・ラディン²⁹⁾

IV-3 メスクワキ族³⁰⁾の育児法

(次なる一文は現代表音による、メスクワキ族の伝承を同族のハリー・リンカーンが口語英語に翻訳し口述したものからの転写である。)

男の子はどうやら、ものがわかるような年齢になれば、自分で自分のことはできるように、人に後ろ指を差されないようにと両親から教えを受ける。でも大抵は、それもほどほどにして、あんまり沢山のことはやらないように、とも釘を刺されるようだ。自分勝手に振舞えば、他人から相手にされなくなるよ、みんなの噂になるよ、と囁んで含めるように諭されるのだ。それから近所の人のものは、決して盗んじゃいけない。また誰か家のそばを通り過ぎる人があっても、その人のことを噂したり、笑ったりしちゃいけない、ともまた。

両親は子供たちに言い聞かす。他人の家には何度も遊びに行かないように。「何処に行っても、それがたび重なれば非難されるものだよ。あいつは、いつも何かうまいものを欲しがってやって来る、とな。」だから、ここの子供たちはあんまりよそに行ったりしないように気を付けている。

それから賭事はやってはならん、と戒められる。運が好ければ勝つこともあるが、それは決して得にはならない。勝っても負けても禄なことはない。こんな風に注意され

るんだ。「仮におまえが勝ったとて、次はそばで見ていた人から誘われて、こんどはきつとスッカラカンになるもんだ。だけど、ただおとなしいだけってのも良くないよ。吝嗇で金持ちだというのも困りもんだ。馬を沢山持っておれば、とにかく人には羨ましがられるが、たとえ、どんなに欲しがられても、絶対人にはやりたくない。こんな風になりがちだから。」

「一番いいのは、誰に対しても親切にして優しい言葉を掛けること。友だちには愛想よく、常にきれいさっぱりした気持ちでいることが大事だし、卑怯な態度は慎むことだ。これができれば、おまえには、たくさん友だちができるはず。喧嘩はなるべく避けることだ。誰かに悪口を言われても相手になるな。言わせて置け。これが一番いい方法だよ。また誰れかの悪事を発見しても、決して騒いで噂を流すような、そんな人間にだけはならないことだ。人がやったことを吹聴すると、いまにおまえは憎まれて、多くの敵を作るようになる。」

もう一つ、男の子が必ず注意を受けること。それは、大勢の人垣が出来て、中で何か起こっているとする。そういうときには決して、近ずいて行って目立つような真似はしちゃいかんことだ。おまえのためにはならんから。人だかりの後ろから何事かと覗くのはいいが、気を付けることだ。誰かに聞かれても、何も知らない、と答えるんだよ。それがトラブルに巻き込まれない一番いい方法だ。

若者が気を付けることはまだあって、それは、誰かにものを頼まれたら、必ずやってあげるとのことだ。あとからまた頼まれるかもしれないが、すげなく断わったりすれば、人間関係にひびが入る。人のためには、いつだって力になってあげて喜んでもらう。それが一番いいことだ、というような忠告を受ける。

さらにおまけにもう一つ。若者たるものはすべからく灰を恐がってはならぬ。断食したり、その顔を灰で汚す行為はマニトウの祝福を受ける。年齢に相応しい立派なことをすれば、必ず祝福されるし、恐がって躊躇すればマニトウにはすぐわかる。断食をし、また灰で顔を黒く塗ることは、若者の為すべき最善の一つだと言われている。昔の人はこう言った。マニトウの祝いを受けるほどの長い断食をするなら、戦場での勝利が約束される、と。またこの断食は相当長くやれば、人の命さえも奪えるほどだ、と。これがわしらが受ける祝福なんだ。狩りの獲物も簡単に殺せる。何事においてもリーダーシップを発揮できる。戦場では隊長となり、部下を安全に帰還させることだって、いともそれはたやすいことだ。決して敵に殺されることもない。断食に興味を持って、実行さえすれば、マニトウの祝福はきつと授かる。かなりの期間断食をやれば、欲しいものは何だって思い通りに手に入るもの。だから断食こそ、やらねばならないただ一つのものだ。ただやるからには、朝早く、われらが祖父の日輪よりも早く起き、ただひたすら祈らに

やならん。もし数年経って何事か、他の人には起こったけれど、自分に何にも起こらなかったら、それは、おまえが不死身になって、この世に生き続けるってことなんだ。こうして初めて生まれ変わり、永遠の命を与えられるんだ。この世の人は、誰だっておまえのおかげで生きていける。これこそ最高にして最善の人生というものだ。こんなふうには子供らは、断食の功德を教わるんだ。

男の兄は、動物に出会ったら決して彼らを殺しちゃいかん。もし、殺したりすれば、おまえだってきっと長生きは出来ないよ、と教えられる。立派な獵師になるように、とも言い聞かされるが。

男子は結婚してからもそのあとに妻とうまくやっていけるようにと、ほとんどあらゆることを教え込まれる。働きが良ければ、結婚相手には事欠かないもんだと。

しかし、もちろんこれは青年になってからの、そのあとからの話であって、それまではただ断食するようにと勧められる。老後まで長生きできるかどうかは、断食次第だ。子供らはまた、誰か人が死んだときにも断食を強制される。誰か死んだ人があるときには、大きな音をたててはいけない、その死体の近くで遊んではいけない、とも言いつけられる。また何か手伝いを頼まれたら決して断わらないように。「家族を亡くした人から頼まれて何かしてあげたら、きっと喜ばれるよ。いつかまた逆の立場になって、人に何かを頼むときには、喜んでしてもらえるのだから。」と、こんな具合に教えられるんだ。

成人してからのその後は、あんまり女の子をからかっちゃいけない。特に自分に姉妹がある場合は、と青年たちは言い含められる。「ぜひ婿養子にと望まれることもあるかもしれない。だけど決まった女性がありながら、なお大勢の娘と付き合うような、そんな男なら、ろくでなしと呼ばれてたって仕方がない。」もし結婚するつもりがないのなら、深入りはしないようにとも諭される。「女を悪しざまに罵っちゃいけない。そんなことをすれば、結局自分の姉妹を侮辱することになるのだから」とも、また。

「一対一の交際が始まったら、またその女と約束を交わしたら、必ず結婚して誠意を示さなくちゃいけない。女の家に行って義理の父母と暮らさなくちゃいけない。精いっぱい親孝行して、この義理の両親のために狩りをするんだ。妻を手荒く扱ったらみんなに噂をされるだろう。そうなれば、まずいよ、と。どこで会ってもそのたびに、みんなはおまえを悪者にする。あれは、妻をいじめる酷い奴だと。世間というのはそういうもので、陰でいろいろなものさ。けちで焼き餅やきの男だと、知らないうちにされているかもしれない。そういうことなら人はいつだって、おまえの頼みを断わるだろう。年寄りには優しくしないと、妻を虐待したのと同じことになる。」

「自分の両親の言いつけには従うこと。それこそ大事で正しいことだ。両親に逆らう、

この頃の若者ほど性悪で始末に終えないものはない。」

「誰かの所有物を欲しがったり、盗んではならない。盗みはやってはならないこと。自分が欲しいものを盗んだり、人のものを欲しがったりしたら、おまえは誰からも恐れられる。乞食も同然の人間だ、と。みんながおまえをそう呼ぶだろう。」

ところで息子たちが成人して、教えられることがまだあった。「友だちには嫌われないように、誠意をもって付き合うこと。他人の女房や恋人に猪介を出してはならん。人を裏切ってはいけない。それは危険なことだから。」これは子供たちに理解させる、一番大事なことなんだ。この戒めを破ったらそれは、それは大変なこと、結局命を失うこともある。親のいいつけが守れずに人生の半ばを前にして何と多くの若者が死に急ぐとか！

娘たちの教育は、すこしばかり違っているな。むろん、最初は同じで自分のことは自分でしなさい、と言い含められる。いいつけ通りに行動すれば、大きくなって楽だから、そういうふうにも聞かされる。いろんなものの作り方は、物心つくようになってから教え込まれる。断食もまたさせられる。大きくなってからも不幸な目に逢わなくてもいいようにと勧められるわけだ。四日のあいだ食を絶つ。どうやら大人になりかけた、その年の冬の間にやらされる。その後も一生守ってくれる、何かの夢を見るように、というのがその理由だ。年頃になった娘たちが食事を摂らないその理由は、後の長い人生に備えるためだ。

こうして大きくなった娘たちは、何か自分でできる手仕事を教え込まれる。女性に相應しいろんなことを覚えるんだ。筵いしや鞆いしの作り方、モカシンやビーズ細工の拵しなえ方も。娘たちは言い聞かされる。嫁入り前にこうしたことは覚えた方が楽をするよ。夫のためにも、家族のためにも、みんなのためになるんだからね、と。

娘たちはまた諭される。「行い正しい娘なら、義理の父にも母からも必ず優しくしてもらえるし、気に入ってももらえるだろう。おとなしくて行儀のよい娘なら、きっといい暮しができるもの。気立てのよい娘ならば、ぜひ妻に、と望まれて大事にもされようが、気が強い上にまた身持ちが悪い、そんな女を殿方は決して妻にはしないもの。」こんな具合に娘たちは、行いには気を付けなさい、と言い聞かされる。

料理を覚えるのは、いろんな物が作れるようになってから。まず、そういうふうにして正しい道を歩むのだと娘たちは言い聞かされる。「いろんなことができれば、楽に生きて行けるんだよ。やがて大人になれば、自分の家庭を持つようになるのだから。」こうして娘たちは進んで働くようになる。

また女の子は、家を離れて他人の家で暮らすように、とも勧められる。もちろんその家の人だって二、三日間は、嫌がりはずまい。だけど、この期間を過ぎたなら、怠け者

は追い出されてしまう。誰も怠け者を養いたくはないからね。こうして娘たちはやっと料理を習うようになる。

結婚したら特に他人に関しては何も言わないように、また人に敵対しないようにとも教えられる。喧嘩をしてはいけない、それはよくないことだよ。他人には親切にして誰とも喧嘩しないように、ということだ。「誰とも仲良くするにはそれが一番の方法だ。人には親切にされるだろうし、誰からも良く言われるだろう。意地のわるい人間は、人に悪く言われるもの。おまえがそういう人間なら、いつか誰かに恨みをもたれる。中には危険な人間もいて、人殺しだってやりかねないよ。」こんなふうには娘たちは、人に意地悪をしたり、意地の悪いことを言っちゃいけない、と諭される。そりゃ、こうしたことを言われたら両親を憎む娘だっているだろう。だけどこれは、習わしで、娘が可愛いからこそそうするわけだ。無事に長生きをしてもらいたいからこそ言い聞かすんだ。もし、何事も教えられなければ、もう好きかってに、てんでがやりたいことをして結局自分が駄目になる、ただそれだけのことだろう。

だけど、それもこれもすべては結婚するまでのことであって、結婚してからは、娘らよ、何をするのも自由だよ。自分で決めて、一番いいと思ったことだけしたらいい。しかし、いろんな教えや決められた規則には従って、夫や他人には優しくする、これが一番の生き方だ。正しく生きるということはなかなか難しいことでもある。

子供を生むようになったら、優しくして可愛がり、決して虐めたりはしないこと。老後になれば子供ほど頼りにできるものはないのだから。

とにかく子供も小さいうちは、余り遠くには行かないものだ。ただし、男の子なら話は別で、自由に好きなのところに行ってもよいが、女の子の場合そうはいかない。理由がなければ外出できず、いつも家に留まって、仕事をしなさい、と言いつけられる。「もし、おまえが年頃になって、ブラブラして何にもしなかったら、誰からも相手にしてはもらえまい。人は必ず噂するよ。あれは、ろくでなしのごくつぶし。いつもいつもブラブラして、考えることはただ一つ、飯を食らうということばかり。いつも何処かでうまいものを探してブラブラしている娘だよ、と。とにかく人の噂には戸がたたぬ。男よりも酷い奴と言われたら、もうそれでおしまいだ。おまえを道路で見かけるたびに人はこう言うだろう。ほら、あそこにいつもうまいものを狙っている女がいるよ。」こんなわけで女の子は、年頃になっても困らぬように、何でも一人でできるように、自活できるようにと、たくさん用事をいいつかる。こんなわけで女の子は両親の言いつけには従わねばならぬ。何が大事で必要なことかを、両親は自分も経験してよく知っている。それを子供に話しているのだから。

トルーマン・マイケルソン³¹⁾

V. 東部部族

V-1. モンタニエ³²⁾地方にて

大湖³³⁾の両岸一帯には、ハドソン湾会社³⁴⁾所有の古びた交易所の建物が群がっていた。毎年、春になれば奥地の部族が白人の持ち込む物資と毛皮などの品を交換するためにそこにやってくるのだ。仲買員とその一行は、長く厳しい冬をできるだけ楽しく過ごそうとするが、それでも建物に吹き付ける、凍えるような突風が何フィートもの積雪を運んでくるような時分には、日々の単調な暮らしを破る手段はほとんどない。しかし、夏の間は短く、それこそ、あっという間に終ってしまう。北の巨大な丘陵地、森林地帯からは、いくつかの畏^{おそ}れ師^{バンド}の分団が冬の間の獲物を携えてやってくるのである。ずっと近くの部族、つまり、この湖の沿岸に暮らす幾つかの部族は、もっと頻繁に毛皮をもってやってくる。そこで、この浜辺と、それから湖と内陸の森の中間の草原は、春ともなれば、これら移動する両分団の獵師数百人と、思い思いに装いを凝らした彼らの家族の露营地となって、騒然としてにわかに活気を呈したのである。

昼間、この北の大地のそこそこには何エーカーも打ち続く、みずみずしく、彩^{いろどり}も鮮やかな花々を一斉に咲きこぼらせる、あの暖かい陽射しの中で、これら新参の人々はテントからテントへと渡り歩き、噂話を交換したり、話し合いに興じて、歌や遊戯を楽しんだりするが、またやがて訪れる冬のための準備にも怠りない。そして、このあいだ中、交易所の長いカウンターの向こうにいる仲買人と、ときどき品物を交換しては、ゆっくりとまた、順々と一年の生活必需品を増やしていったのである。夜ともなれば、二人、三人と分かれたテントの中では、チラチラと瞬く灯火に静かな家庭生活が照らし出される。中では、もう藁や毛皮を敷き詰めた床の上で寝ている人もあれば、忙わしく針を動かして縫物に精を出す人、それから、互いに何ヶ月も会っていない人々同士が訪問を交わして、まだ夜の早い時間を楽しげに語り合う、その低い声も聞こえてきた。

奥地の部族は、湖の周囲に狩猟場を持つ人々より常に二、三週間遅れて交易所にやってきた。彼ら内陸民の家族は、何台かの荷物を満載した犬橇に分乗するのだが、最後尾にはカヌーを配し、これらを曳く数匹の犬を追い立て囃しながら 600 マイルの距離を踏破するのである。春の訪れが間近になって雪が溶け始めた南方に到着すると、みんな橇を降りて荷物をカヌーに積む。それから先は増水した川にこのカヌーを浮かべ、こうして大湖までの旅の最後を締めくくる。

品物の交換が完了すると、彼らは元来た道を逆に辿りながら——今度はカヌー、橇の順で——引き返していく。湖畔の部族より二、三週間早く交易所を離れるわけだが、これはもう数え切れないほどの世代にわたって繰り返されてきた習慣なのである。

湖畔の人々にとって奥地の部族民を決して羨ましいと思ったことはなかった。交易所に近い

ことが最大の利点と考えているからだ。真冬になれば、ほんの僅かな距離を歩くだけで交易所の仲買人やその従業員たちと一緒にクリスマスを祝うこともできるのに、奥地の友人たちはひよっとすると凍死したり、獲物が取れない場合は、餓死する恐れだってあるのだから。

だから、これら湖畔の民は、単純な森の住民より自分たちはずっと賢くて、エライのだと思い始めていた。都会から戻った彼らの一人がスマートな新調の服を着て、大量のジン酒、それに湖の岸に建てた木材の家、その室内の棚やテーブルに置く装飾品を都会から持ち帰ることがよくあったが、しかし、なんといっても高地の人々が一番贅沢な夢として、もの珍しがるのは、欲しいものが何でも手に入る賑やかな大都会の話そのものなのであった。

一方、内陸部の部族の人たちにとって、確かにこれらの話は夢のように思われたし、彼らは実際、都会帰りの土産話を聞くのを好んだけれど、しかし、ほんの一瞬だけ外の世界と接触した人たちの吐く、激しい息使いとか、ヘトヘトに疲れきった様子、空っぽの財布などから判断して、彼らの胸には、どうも都会というところは、この連中が吹聴するほど、いいところでもなさそうだ、万事いいことづくめの、そんなところがこの世にあるわけがない、という疑いが生じはじめて、それが消し難いものになっていた。

こうした湖岸の人々の虚栄心、自惚れから、アントワヌのような若者が生まれたのだ、といってもいいだろう。体格も頑健だったが、この青年はフランス語に通じ、また商売全般にわたっても詳しく、抜け目ない才能の持ち主だったので、帰っていく猟師たちと取引を推進させるために定期的に湖までやって来る毛皮商人たちにとっては、なくてはならない存在となっていたのだ。

服装によってもアントワヌの社会的地位の向上は明らかだった。その独楽型のズボン、腰の狭まった上着、足先にスエードの革をかぶせたエナメル製の靴、青いセルロイドのカラー、規格品のネクタイ、緑色のウールのゴルフ帽などで、着手がモンリオールの横町の住人であることが一目瞭然だったが、同時にその褐色の肌や、薔にらみの腫、滑らかな毛髪などによって、この人物は北方民族出身であることもまた、すぐに分かったのであるが。

ブロークンながらもフランス語で（また同じくブロークンながら英語も出来たが）、罵り合いとなれば、あの立派なハドソン湾株式会社交易所のフランス系カナダ人の従業員たち、それから、その大会社と覇を競うためにやってきたモンリオールのレビリオン兄弟会社の社員たちに一歩もひけを取らなかった。

実際アントワヌは都会風のスマートな習慣を身につけて、絶えずおびただしいほどの紙巻タバコをふかしていたし、ジンやブランデーの臭いは、もうその身体に染み込んでいた。彼は、ときには、自分が高地の人間であることを忘れることさえあった。だから、同じ部族の人に注意されるまでは、自分が仲買人たちに有利なように取り計らって、この人たちを彼らの餌食にするのはまずい、ということにも気が付かなかったし、その虚栄心が他の若者に伝染して、彼

らから好ましく思われていることも知らなかった。若い娘らにとっては、アントワヌは一層魅力的に見えたらしく、この沿岸の部族民の中で、彼が手をつけなかった娘はほとんどいない。そればかりか、この男の虚栄心は留まることを知らず、ときには、北の丘や森を越え、つらい旅を両親とともに堪えてやってきた、素朴な娘たちにも食指を伸ばし、なんとかしてその戦利品の中につけ加えたいものと思いめぐらす有様だった。

奥地の部族民を率いる首長はシェカペオ、「(「後方に下がる」の意)」という老人で、厳格でもあり、また練達の猟師でもあったのだが、彼にしても毎年、その収入の多寡は概して一番価値のある珍しい毛皮がその収獲物に含まれているかどうか、それ次第なのである。そこで、今や交易所の周辺では名士であり、著名な人物にのし上がっているアントワヌ——その性格的な欠点はよく分かっていた——と自分の娘の間に婚儀を整えば、万事が好都合に運ぶのではないか、そう思うことがたびたびあった。自分の猟師としての腕前と、アントワヌの、あの豊かな取引の経験と広い顔がありさえすれば——炉火の前に腰を下ろして煙草をふかしながら、老人は一度ならずもそんなふうに思い描いたのである。にもかかわらず、彼にはどうしても決心がつかなかった。というのも、この娘と自分の分団^{バンド}に属する、ある青年の間に親密な愛情が芽生えて、最近それが次第に大きく育ってきたため、父親としてその関係を台無しにしたいはなかったし、この若者の冷静な活力と、畏^{おそ}猟師としての技術は、常日頃彼の賞賛するところだったからである。娘自身は、もし判断を任せられても、ほとんど言うことはなかったであろう。前日の昼間の火照りが、鏡のような湖上の遥か北の方に蜃気楼を生み出した美しい静かな朝^{あした}、彼女は湖のほとりで生まれた。母は、この子を生んで直ぐ後に初めて目にした、この現象にちなんで、娘をイリトワシュトウ、すなわち蜃気楼と名付けたのだった。蜃気楼もまた、父親同様、大地とアントワヌを比べて何か思い当たるところがあるようだった。しかし、何処となく謎めいた雰囲気を持つアントワヌに対して次第に興味を抱き始めたらしい。あるときアントワヌが仕事上父親に話があってテントを訪れたときだった。一度だけだったが、それまでモカシンをじっと見つめたまま、伏せていた目を上げて、思い切って正面からこの青年の顔を凝視したことがあった。そのときは、ちょうど父親が背を向けていたときだったので、アントワヌが話しかけてきたが、答えるまでには至らなかった。

冬になった。シェカペオは断崖湖^{きりざし}地帯の狩猟場に戻っていた。今年は、すぐ近くに大地青年の家族がキャンプをしていたが、元来この一家はこの季節に、貂^{てん}の毛皮を狙って、代々この地域を狩猟場にして畏^{おそ}を仕掛けていたからだ。両家はともに近いところに縄張りを持っていたが、しかし、ここ五、六年、乱獲によって減った動物の数を回復するために、中間の地域を設け、お互い出来るだけ離れたところで猟をするよう申し合わせていたのであった。

シェカペオ老人も、大地青年もともに縄張りの境界がどこであるかは、よく弁^{わきま}えていた。冬の間、彼らは家族同士でときどき訪問し合うこともあったし、猟場権を交換する計画さえ話

し合ったこともある。例えば、ある年など、シェケペオの縄張りで熊が急に増えたことがあった。これは開花期に山火事があってそのあと、木莓が異常に繁殖したことが原因だった。同じ年の冬、今度は大地青年の縄張りで、トナカイの数が異常に増した。そこで互いに境界を越えて自由に猟をすることに決めたのであった。大地はシェケペオの熊の多くを殺したし、シェケペオは大地のトナカイを必要なだけしとめたのである。

ある晩冬の、まだ厳寒期に当たる時分のこと、大地の家では何人かが病に罹り、咳と脚の痛みに苦しんでいた。病人の世話という余分の仕事が大地上に加わり、どうしても露营地を離れることが出来ず、仕掛けた罠を点検に行くことさえ、ままならないことがよくあった。しかし、あるとき、ポブラ川の沿岸を2マイルの距離を置いて仕掛けた10個の罠を調べに出かけた。二日目が暮れようとするところに、九番目の罠までを見終った。天候は極度に悪化して気持ちも減入ってきた。もう日も暮れてきたので、雪靴の片方で除雪したところで焚火をして、鍋で湯を沸かしお茶を飲んだ。火の近くには、二匹の愛犬、ヌトフム（わが猟師）、カワブシェット（白）が横になっている。彼らは先祖代々にわたって同じ名前を世襲してきたのだ。柔らかく、また深い雪の上でトボガンを曳いてきたので両方とも疲れきって寝ている。九つの罠で獲物が掛かっていたのはほんの僅かで、あとは空っぽだった。これから天候がますます悪化することが予想されるだけに、事態はますます深刻になってきた。尖った巨大なアメリカ樺^{ツガ}の森林の真上の、北東の方向には、鉛色の重い空が長く平らに続いている。同じ方向から、ときたま吹き付けていた疾風が、夕べにはさらに頻度を増してきたので、大地は何度も辺りを見回したり、後ろを振り返ったりし、二匹の犬に向かって、もうひとふんばりするよう短く鋭い言葉で叱咤するのであった。

さて、石製のパイプをふかしながらも——彼はときどき、遠く離れたあの交易所で手に入れた、乾いた煙草の葉をパイプに詰め替えた——彼の目は疲労困憊の状態にある犬たち、それから丘の上の北方にゆっくりと広がっていく灰色の雲の帷^{とばり}にじっと注がれた。十番目の罠をどうするかという問題が大地の心に重くのしかかっていたのだ。もし、彼らがこれから、もう3時間力を振り絞って向かい風と闘いながら現場に急行したとすれば、あの鉄の顎には、たとえ一匹であってもしっかりと獲物が挟まっているのだろうか、それとも空っぽの仕掛け装置を目の前にして自分は意気消沈するのであろうか？たとい掛かった獲物がなんであれ、自分と犬たちが危険を賭してそこまで行くのに支払う代償は、事実、大変高価なものになるはずだ。携帯した食料も底を着き、あと一日、必ずやってくる雪嵐^{ブリザード}と格闘するような状況では、果してそこまで到達できるのだろうか？これまでの経験からして、そんな疑問さえ浮かんでくる。仮に今すぐ引き返せば、追風を利用して向こうの環湖^{ラウンド・レイク}端の小さな基地まで戻れる。そこで一泊すれば、もうあとはわが家まで僅か一日足らずの行程だ。そこには、病気の家族、母や兄弟姉妹が、きっちり樺の樹皮で屋根を葺き、トナカイの毛皮を張り巡らした暖かいテント——彼の毛皮

で裏打ちしたミットンの手袋の内側みたいに暖かくしてある——の中で快適にまた心地よく自分の帰りを待っているだろう。しかし、もしあの十番に動物が掛かっていたら、それもひょっとして、貂か黒狐だったとしたら？これらの動物の毛皮は、彼がいま喉から手が出るほど欲しい、いろんな品物と交換可能な貴重な財源になるはずだからだ。

この間パイプの煙草は何度も詰め替えたし、また煙草袋に括りつけて持ってきた、何かの動物の骨のような刃できれいにパイプを掃除している間も、彼はまだ決心がつかないみたいだった。ついに思いを決して踏ん切りをつけるかのように、やおら、夕食用に取っておいた野兎の死体を入れた袋に片手を突っ込んだ。何度か小刀を動かしてこの小動物の肩甲骨を切り取ると、まだくっついてある肉は噛み取って綺麗な褐色の骨だけ残した。それから細い一本の棒先に、この野兎の肩甲骨を載せて火の近くにかざしたのである。同時に両唇をほんの少しだけ開けて「カ ナ カナ アー カ ナへ」と低い声で呪文を唱え始めた。そのうちに、火の熱によって骨は真ん中あたりが黒くなった。やがてまん中から端にかけて一本の亀裂が入ると、それが全体に及んで、真二つに割れ、片方が焼け落ちた。ト占は完了した。野兎の精霊は十番目の罨まで行っても無益だという予言を彼に告げたのである。

どうやらこれでふっきれたらしく、さっぱりした様子で、大地は器用な手付きでパイプの掃除を終え、占いのために引っぱり出した二、三の品物は元通り袋のなかに納め、雪靴の先でトントンと地面を蹴って両の足が、硬直した靴の中にしっくり収まる具合に調整したあと、最後に櫓をぐるっと180度回して滑走面の先が、元来た道の方角に向くようにした。そこは30分前、犬が走りやすいようにと雪を踏み固めて道を作ったところだった。

ことさら犬たちを励まして曳綱を締め直す必要はなかった。彼らは今にも櫓を曳いて走り出そうと逸っていたから。しかし、前方からは、森を通り抜けたばかりの吹雪が烈風に乗って斜めにこちらに吹き付け、なおも道を覆い始めているのだった。

北風のキウエディンが、これから北の民族の世界に君臨する支配者になろうとしているのだ。ちょっと前まで考えていたこと、十番目まで行ったとしたら、どんなすごい獲物が引っかかっているだろうか、などという甘い考えは彼の心から消し飛んでしまっていた。夢の中に出て来て自分の守護霊になってくれた動物である「野兎」のお告げに従ったことを彼は後悔していなかった。もし、あのまま獲物を確かめに出かけていたら、おそらく自分を待ち受けていたに違いない、その苦難を免れて、首尾よく家に帰り着けるだろう。彼のこの「虫の知らせ」にはまんざら根拠がないわけでもなかったらしい。というのは、追風に助けられてその晩なんとか、中継地にたどり着いたのだから。道以外のところはもう、完全に雪に覆われていたが、しかし、櫓の前方を走って、犬が走りやすいように雪靴で前の雪を固めてやることは出来たのだ。その晩、基地の中で彼はもう一度、例のト占、すなわちムトゥンシャワンを試みた。骨は前と同様に二つに割れた。しかし、今度はヒビは肩甲骨の表面をジグザグにわが家の方向に走った。こ

れは、明日はこの方角に向かうべし、という確かな託宣なのである。

長い北の夜が明けて、ようやく出発できるほどに朝日が道を染め始めたころ、大地は、往きのときに捕まえた動物の肉の残りを犬に与え、自分も食べた。日没前、依然背中に風を受け、降りしきる雪の中を悪戦苦闘しながらも、徐ろに林の中の空き地に入り込んだ。その真ん中近くには、三戸ほど樹皮の小屋が建っていて、ちょうどその煙穴から細い煙が三本、ほぼ水平にたなびいているのが見えた。彼がここを吾が家と呼んでから、もう9ヶ月にもなる。何匹か小さな雑種犬が、テント小屋の一つから、踏み固められた戸口にのろのろと現れて、ぜいぜい咳を立てるみたいな吠え方で、一家の息子であり、弟でもある大地の帰還を中にいる女たちに知らせたのだった。みんなは火をおこし、野兎の煮込み汁と、トナカイの薫製肉の食事に取り掛かった。大地は毛皮の覆いを持ち上げ、ひょいと身を屈めて、その低い入口をくぐり抜けると、火の方へ進んだ。それから長女の膝の近くの大枝の上に獲物を入れた袋を置いた。忙しく立ち働きながら彼を見やる家族の眼差しも、それを見返す彼の瞳も、万事順調のしるしだ、とみんなは感じた。そして長女が櫓から荷物の一つを下ろし、みんなの前で中味を出してみせたとき、彼らの顔には明るい笑顔がともった。中位の大きさの毛皮数枚と、それから皮を剥いてみると、あとは明日、なんとか煮込み汁にできる程度の肉しか残らなかったのであるが。

雪嵐が荒れ狂い、病人の回復が大きく遅れた。大地が元気を取り戻し、再び犬に曳き具を着けて仕掛罟を調べに出れるまでに数週間を要した。一家はこの間、トナカイの薫製肉と、野兎の肉、それに少量の小麦粉でなんとか、短い期間ながらも飢えを凌いでいた。

そのうち、ようやく好天が戻り、風にも恵まれて罟の巡回に出かけることが可能になった。強風や雪の圧力、さらには成長する下生えの枝によって引きちぎられた罟は、付け直さなければならぬ。十番目の罟を掛けた場所に来た。凍り付いた雪をこそぎ落とすと、何と、そこには、さんざん噛まれ食いちぎられてはいるが、素晴らしい黒狐の残骸が掛かっているではないか！大地は、この両手の大きさしか残っていない、絹のような光沢を放つ、黒インク色の毛皮をそこに呆然と立ち尽くして眺めていた。損失は2,500ドルは下るまい、と彼は思った。数週間前、あの酷い天候を押してこの十番まで来ておれば、この毛皮が無事手に入っていたかもしれない。家に帰ってみると、大地を驚かしたことがもう一つあった。隣人のシェカベオ老人が、この柔らかい深い雪の中を丸一日苦労して、今や一人の若者の双肩に全員の生命がかかっている、この一家の境遇に同情し、その安否を気遣ってわざわざ見舞いに訪れたのであった。シェカベオは、感情を表に現さず、大地がせっかくの掘出し物をみすみすふいにした、その話を聞いていた。しかし、翌日帰途につく間、犬たちが走る前の雪道をトントンと踏み固めているうちに、大地には何か悪運が取り憑いているのではないかと考えた。彼の思いはそれから、来るべき交易の季節、特にアントワヌの羽振りの良さに移っていったのである。

春が来て交易所の周辺ではこの間、「大地と十番目の罟」の話で持ちきりだった。しかし、

聞き手の反応は、必ずしもこの「冒険譚」の主人公に好意的とは言えなかった。ことにアントワヌが、たまたま娘の蟹気楼もいるときに、シェカペオ一家を訪れて、みんなの前で「大地は馬鹿だよ。よりもよって何千ドルもの価値のある獲物が、どうぞ、来て下さいといわんばかりに待っているというのに、わざわざ引き返すなんて！」と言ったあとはそうだった。また、大地の運^{つぎ}のなさを解釈して、この男はこうまでいった。「大地の守護霊は大方嘘つきなんだろ。さもなきゃ、あの晩、引き返せなどというお告げをする筈がないからな」

交易所の白人が「八月」と呼ぶ、あの月が出て鳥たちが旅立ち始める季節、奥地の人たちは取引も終え、カヌーを修理し、付き合いにも十分堪能すると、湖岸の人々に別れを告げ、一路、北の不毛の大地へ帰って行くのだ。

上りの道が続く間、これから一家が狩猟場での冬を乗り越えるために必要な、食料や様々な物資——その大部分は彼が仲買人から信用貸しで手にいれたものだが——をカヌー3隻に積んで、32箇所もある連陸水路を渡らなければならない。もし好天がこのまま続けば、帰路は40日ばかりですむ、と彼は見ていた。渡らねばならない最大の湖は、9マイルの長さがあるが、しかし、強風が吹けば、沿岸を迂回するために倍の距離を進まなければならない。積荷は、全部で約2,000ポンドの重さがある。小麦袋に15袋、豚肉200ポンド、煙草10ポンド、粉100ポンド、油100ポンド、お茶10ポンド、塩40ポンド、火薬が20箱、石鹼25本、蠟燭2箱、弾丸12箱、ライフルの弾薬筒4個、仕掛罠(ビーバーサイズのもから熊サイズまで)300個、これらの品すべてを3隻のカヌーに積むのである。母や、姉妹、弟たちにも手助けしてもらって、水深の深い、波のない穏やかなところは漕いで渡れるだろう、しかし、連陸水路とか、浅い湖は漕ぐことは出来ないから、荷物はみんなの背中に乗せて、リレー渡ししなければならない。

長い苦勞の果てにやっと旅を終えた、大地やその他の人たちの家族は、いままた、この遠い住み慣れた狩猟場に戻って、テント小屋を張り直すことになったのである。一夏の留守の間に、山嵐や他の害獣類がキャンプ跡に残された油物を漁って大暴れしたらしい。また、ときには通り過ぎりの熊も顔を覗かした痕跡がある。トナカイやムースが、この林間の開拓地の置き去りになったテント小屋に、その鼻先を突っ込んだのも一度や二度ではないようだ。彼らはまるで、冬の間はあんなに自分たちの命を欲しがる人間どもが、夏の間は遠い湖で魚を取ったり、白人のもたらす罐詰めの食料を食べて暮らしているのを熟知しているみたいだった。

そこでまた、この内陸部の部族民は、さらに一冬の間、森の野生動物をあやめるのに忙しく、同時にまた、これらの殺した動物の魂を生き返らせることにも忙しかった。彼らは、絶えず太鼓を叩いたり、歌を唱ったり祈祷したり、その他、様々なシャーマン的な神事を行うことによって、これは可能だと信じているのである。

ところで交易所にいるアントワヌにとっても、この冬はやはり活動の季節だった。アント

フーヌの雇い主はフランス人の、抜け目ない独立商人で、春になって森を出てやって来る奥地の人々との商売を独占する計画を練っていた。その計画というのは、度の強いウイスキーを20箱ばかり、大金を賭けて湖まで——途中税務官の目をかすめて——輸送することに他ならなかった。このフランス商人は自社の所有する一切の財産をこの企画に投入するつもりだった。また結局アントフーヌにも打ち明けたのだが、それに付随してアントフーヌが所有する全土地を一千ドル以上の現金に換えることになっていた。これまでの仲買人が死んで、交易所は閉鎖された。だけど、持ってきた毛皮との交換品は、新しい会社が苦勞して好きなウイスキーが飲めるようにしてやったから心配はいらん、こんなふうに彼ら奥地人に言い聞かせば、必ず大儲け出来るだろうと、この二人はほくそえんだ。奥地部族がたいてい下ってくる、あの^{サ・リヴァー・ウェア・ムース・アバンド}大鹿の群れなす川を数日掛かって上り、彼らがちょうど通りかかるところを呼び止めれば、まんまと連中は引っかかるだろう。

アントフーヌが責任者となって湖から、その川の上流のある一点まで——そこは貴重な毛皮の荷を携えた奥地民が必ず通りかかる——偽装した荷箱を隠したカヌーを漕がす目的で、七人の屈強な男がかなり慎重な人選で雇われた。いよいよその当日、早朝、ウイスキーの荷を運ぶ船団が湖を出た。舵手たちは、ときどき船荷の中味を失敬しては疲労回復にこれ努めながらも、とうとう予定の場所に到着した。荷物を下ろし、下ってくる獵師たちを待ってテントを張った。アントフーヌの期待は大きかった。内陸部の連中が彼の口からその驚くべき出来事を聞いたときの狼狽ぶりと、それから酒樽を目にしたときの熱心な態度が今から想像出来た。いったん飲み始めたら、最高級の毛皮を売り払ってでも最後の一杯になるまで彼らは止まらない。こうして自らも既に商品の一部を味わってすっかりご機嫌になった彼の夢は刻一刻、ますます大きく膨らんでいったのである。

その晩、みんなが踊る火の周りに腰を下ろしたとき、監督アントフーヌの胸の中にこれから起ころうとしていることについて、いささかでも疑念が生じていたとは思えない。7人の舵手は、みな湖岸部族民だったが、ある行動を起こすことで一致団結していた。それが、嚴重なカナダの国法に適うからというだけでなく、彼ら自身にとっても都合がよいと思われたからだ。これは特に内陸民の友人たちに対する忠誠心によって促される行為とも言えた。これら湖岸の男たちは長年の経験から、友人である森の部族民が、もしこれから遠い森の狩獵場に帰っても、来るべき冬に備えて手に入れるはずの物資が、飲めや歌えのどんちゃん騒ぎの果ての残骸に姿を変えたとすれば、一体どういう結果をもたらすかをよく知っていた。それゆえ、彼らの決断は、単に友情という面に留まらず、国家の利害という面でも、また人間として当然なすべきことを実行するのだという面からも、彼らの良心を大いに満足させるものだったのである。

夜も更けて、アントフーヌは極上のウイスキーをしこたま味わって、すっかり酩酊状態にあった。部下の一人が、彼にマッチを貸してくれと頼んだのを機会に、他の二人が予め何重か輪

にしておいたロープを掴んで背後に回ったのにもまったく気付かなかった。あっという間もなく、ひっくり返され、両手を後ろに回されて、両足もろとも縛り上げられてやつのこと、我に返ったが、もう後の祭りだった。ナイフを納めた鞘に手を伸ばそうとしても、大声を上げてじたばた暴れ回ろうにも、また手足を縛る縄を噛み切ろうとしても、もはや無駄な抵抗というものだった。テントの片隅に窒息しかけた熊みたいに転がされたまま、フランス語で悪態をついたり、北アメリカのインディアンなら怖がるような、ありとあらゆる恐ろしいことを叫んで脅そうとしたが、どつとばかり囁きたてる嘲りの声に掻き消されてまるで効果なかった。彼らは彼の制服が泥まみれになって、その都会人ぶった気取りが消えたのを見て嘲った。これら湖^{うみ}辺の陽気な男たちは、鋭い斧を振るって箱を叩き割り、20 個ばかりの平らな瓶からコルクの栓を引き抜いて、その透明な液体が、ゴクゴクと彼らの喉から滑り落ちて消えていくときに、またワイワイ、ガヤガヤ、一層賑やかに囁きたてたのである。

さて、こうして丸二日、このバッカスたちの陽気なキャンプから発する、歌や叫び声が森の中に届いた。湖岸の連中の喉から出る歌声は一時間ごとに、ますます大きくなる一方で、アントワヌの呻き声は、時間とともにますます弱まって来た。内陸部の人々が、もしこの声が聞こえる範囲まで来ていたら、おそらく敵対する盗賊団同士が彼らの平和な川の上で抗争を繰り広げているものと勘違いしたかも知れない。従って偵察を送って、ことの真相がハッキリするまでは、どこかに身を潜めて待機していたに違いない。しかし、たまたま数マイル前の連陸水路の一つで手間取ってしまい、加えて看病を要する病人も数人出た、そういう状況だった。全員が舟下りの旅を続けられるようになって、病人の状態に障らないようにと、ゆっくりと舟を進めていたのである。

アントワヌの野営地で箱が壊され、中味が流出してから二日目のこと、内陸民の船団はやっと、この川がある一箇所、大きく彎曲しているところで、このキャンプ地に出くわした。このときにはもう、すっかり泥酔した陽気な酒飲みたちは、全員そこら辺に転がって深い眠りの真只中であつた。十分な警戒を払って、恐る恐る上陸した、この奥地の部族民の中でも最も屈強な男たち数人は、てっきり、これは死者の村にぶつかったな、と思った。もっとも彼らが後で述べたように、辺りに充満する臭いはどうも、あんまり死臭とは言えないようにも感じたのだが。彼らが事情を察知するのにそう時間はかからなかった。それから 10 個余りの地面に転がっている、平たいウイスキー壺を目にして、おそらくこの中味は、思慮深い湖岸の人たちが、この特別の機会のためにわざわざ取っておいたものか、あるいは、初めてこれほど大量の荷を目撃したので、興奮の余り、つつい味利きしてしまったものだろうと、見当をつけるのにそう時間はかからなかった。今度は内陸部の人々が、これら湖岸地方の人々に配慮を示す番だった。この人たちは、雇い主への忠誠心を犠牲にしてまで同民族の誼みを通してくれたのだから。アントワヌさえも、縄目を解かれて立ち上がった。しかし、二日間絶食し、おまけに湿った

苔の上に転がされて制服もすっかり濡れてしまい、彼の体力はすっかり衰弱していた。「生き返」ったのは、彼の仲間の方が早かった。そして彼らの口から、当惑気味の内陸部の狩猟民に事の顛末が明らかにされた。

一、二日後、眠りと、新鮮な魚と、それに冷たい水で、すっかり元気を取り戻した一行は、カヌーを押しながら岸辺を離れて行った。

奥地の人々はそのまま交易所までの旅を続けた。しかし、今度の旅は彼らの何人か——特に二人の若者の間の——関係に大きな変化をもたらした。その二人の若者とは、大地と蜃気楼のことに他ならない。

フランク・G・スペック³⁶⁾

V-2 揺れる花、イロクオイ族³⁶⁾の女

1

その女は樹皮の家で生まれた。母親の朝日は生まれたばかりの、わが子の小さい顔を見て驚いた。もう随分と昔のことになるが、この顔を見た記憶があったからだ。それからすぐ、この子は自分の曾祖母、つまり朝日の母のまた母——この人には少女の時分、何度も会っていた——に瓜二つだ、との確信を得たのである。曾祖母、揺れる花は若かりしころ、偉大な女まじない師だった。彼女の名声は遠く、広く伝わって、あるとき、気の触れた婦人を正気に戻したとも伝えられたほどだった。朝日に躊躇している暇はない。この子に揺れる花という名前をぜひとも付けたい、と思ったのだ。

朝日は産後の肥立ちが回復するとすぐに、清流、つまり朝日が属している熊一門の名付親の元を訪れた。この名付け親から母は、自分の遠縁に当たる揺れる花が最近亡くなったこと、さらにその名前は「箱に入れて蔵ってある」ことを教えられたのである。

母は今や自分の望みを阻む障害は何もないことを知った。わが娘は揺れる花と呼ばれることになったのだ。

秋になると、朝日は「大緑殻祭」³⁷⁾の準備を始めた。そして祭りの二日目、幼い揺れる花の手を引いて長い家³⁸⁾にやってきた。みんなの前で正式に子供の名前は認められることになっていたのである。

2

幾たびか夏が巡り来たが、揺れる花の人生は何事もなく過ぎた。母の朝日は優しかった。優しく宥めるような声で何時間でも幼い揺れる花に語りかけ、夜には、物哀しく単調な子守歌を歌っては、わが子を眠りに就けたのである。秋の刈入れ時、朝日が他の女たちと畑で忙しいと

き、揺れる花は毛布にくるまれた。しっかりと板に括り付けられて、楡の木の太枝から吊されたのだ。微風に揺られながら、幼な子は、すやすやと眠っていた。母の朝日が懸命に働いている、その傍で。

3

また幾つか夏が過ぎた。揺れる花はもう幼児ではない。母に料理を教わったし、トウモロコシを大きな木臼で挽いて粉にする仕事ももう手伝った。やがて刺繍も出来るようになった。指先は素早く、目のいい揺れる花は彩色ビーズや貝殻玉ワムバムシエルを選び分けるのが上手かった。だから蕾が膨らみ花が咲き、木の葉の匂う、この世は吾が世だとも思っていた。自分や母、あるいは他の女の人のものなんだ。「だって男の人って、そんなこと何一つ知らないんだもの。」

ある日、ふらりと朝日の兄がやってきた。揺れる花はこの叔父が小さな仮面フォーリスフェイスを彫っているところを見てしまった。長らく覗いていたけれど、気付かれた様子はまるでない。叔父が帰ると、さっそく木や樹皮の破片を使って、彫刻の稽古をやり始めた。こうしてどんな男にも負けなほど彼女の腕は上達した。しかし、このことは誰にも話さず、また誰に見せたわけでもなかった。「彫物など、女のする仕事ではありません」と、常々言い聞かされていたからだった。

4

何回か夏が過ぎた。揺れる花はもう年頃の娘だ。その瞳は大きくまた黒く、深い色を湛えていた。太く、二つに束ねたその髪は、豊かに肩から流れていた。道を歩けばじっと目を注ぐ若者もいれば、慌てて目を逸らして、急ぎ足になる男もいた。だが、彼女はすべてを無視して通り過ぎたのだ。この揺れる花は、踊りもまた上手かった。莓や木莓などの収穫祭³⁹⁾では、踊りに興じる彼女を見て、大人たちはみな褒めそやしたものである。

5

また木莓の熟れる季節が来た。揺れる花も若者だけで結成される友の会に加入した。みんなで森にキャンプした。偉大な語り部の響く声リンギング・ボイス老人も一緒だった。

夜ともなれば、仕事を終えた青年たちは、赤い、タップリ果汁を含んだ木莓で一杯の籠を提げては戻ってくる。みんなで火を囲んで腰を下ろしているその間に、料理の腕にかけては定評のある、素早い手と家政婦クイック・オブ・ハンドが、美味しいトウモロコシ鍋を用意するのだ。食事のあとはデザートに山盛りの木莓が出る。そうしてのち、響く声がパイプに火を点ける。木の切株に背をもたれて、膝が顎に着くくらい、深く脚を折曲げる。老人は間合いを計るようにゆっくりとした調子で語り始めるのだ。ここで初めて揺れる花は、動物たちの言葉を覚えたし、昔、野の獣や森の鳥に心優しい一人の戦士が、スー族の矢を受けて倒れたあとに、その動物たちの介護によ

って生き返ったという、そんな話も聞いたのだった。彼女は妙薬ガノダのことを知ったが、これは動物たちが、自分の身体の一部を犠牲にして作ったもので、彼らはこれを万能薬として使うように、くだんの戦士に差し出したのである。少女はまた、胸を踊らせながら^{ペール・フェイス}白面と呼ばれた、ある色白の若者の物語を聞いた。若者は一人で森の中をさまよううちに小人たち⁴⁰⁾にふと出会い、彼らからピグミー（小人踊り）という一種の魔法の踊りを習ったという。母に話せば、いつの日か揺れる花自身、この踊りを踊るようになるだろう、ということだった。それから毎晩のように、この若い男女は響く声の語る、あの偉大なイロクオイ連合⁴¹⁾の創立の話や、連合を組織し法律を定め、大平和を達成した、偉大な二人の酋長、デガナウイダ⁴²⁾とハイアワーサ⁴³⁾の話に魅せられたのであった。

ある晩のこと、みんなが火を囲んで座っていた。響く声老人でさえ、自分の美声に聞き惚れて、話しに夢中になっている。そんなときだった。ふと、誰かが自分を見ている気がして、揺れる花はその方向へ顔を向けたのだ。^{スレート・アズ・アズ・アロー}矢玉と呼ばれ、背が高く、ほっそりした若者である。大きな驚いたような目を向けてじっとこちらを見ているのだ。彼女は思わず目を逸らした。それからとうとう一晩中、一度だってその方へ目を向けるさえも出来なかったのだ。

こうして毎晩、響く声の話が続くその間も、その目は自分を見据えている。一度たりとも振り向かなかった。身動きするのも恐かった。でもその目は動かない。じっと自分に注がれたまま、決して離れることのない、その目を彼女は感じていた。

月も雲間に隠れていた。キャンプの周囲一帯が静まりかえった夜だった。風のようにやってきた男に彼女は襲われた。恐怖にすくんだ揺れる花。叫び声さえ出なかった。^ち唇は開いても^{のど}喉元が詰まって声にならなかった。胸は激しく波搏っていた。濡れた草の上に倒されて、体は熱く震えていた。

揺れる花は身篋った。次の春がやってきて、彼女は子供を産み落とした。しかし、生まれた子供に声がない。この世に出た、そのときからこの子はもう、死んでいた……風の無い、月も照らない晩だった。深夜、人目を忍んだ二つの影が、毛布にすっぽりくるまれて、樹皮の小屋から抜け出した。一人の腕には小さな包、影は静かに闇の中、滑るように進んでいく。やってきたのは、熊一門の共同墓地のあるところ。こうして望まれもせず、喜ばれるもせず、この世の中に生まれ出た、名もなき小さな存在は闇の中に葬られた。誰にも見られず、また誰一人、知る人もない出来事だった。揺れる花さえ、しばらくすると、すっかり忘れてしまったのだ。

6

しばらく経ったある日のことだ。母の朝日は妹の住む、その村落を訪れた。たまたまその日は、^{ビーン・フェイス}豆祭り⁴⁴⁾。朝日が妹と、またその家族と連れだって長い家に入ったとき、そこで彼女は名^{フリート・オブ・フット}走者、捷い足を一目見て、すっかり魅了されてしまったのだ。鹿のようにスラリとした、優

雅なその長身から目を離すことも出来ないほどに。宴がはねると、この朝日、さっそく捷い足の母親の種蒔きに話しかけた。ぜひこちらの村にも遊びに来て、と熱心に彼女を招待したのである。

7

それからまもなく、種蒔きは約束通り、朝日の家にやってきた。訪問先の、この女主人と一緒に畑に出て行った。トゥモロコシはもう、すっかり刈入れ時だ。背中を屈めた長い人の列が並んでいる。緑の葉っぱと黄色の穂軸が、ちらっと女たちの肩越しに見える。と思う間もなく、その実は引きちぎられて背に吊した大きな籠の中に消えて行く。

「ほら、あの三番目の列の、あの娘！」おもわず種蒔きは叫んでいた。「二人分の仕事をしているよ。見て、あの手の動き！。目にも留まらぬ速さとは、あんなのを言うんじゃない？」

「わたしの娘の揺れる花だわ。」と朝日が答える。「捷い足のいいお嫁さんに、なれるとは思われませんか？」

「籠一杯分のトゥモロコシパンをあの娘に作らせて下さらない？捷い足にもすぐに支度をさせますから。」

8

その晩のこと。朝日は揺れる花にこう告げた。「あなたも、そろそろお年頃。お嫁にいくにはいい機会です。捷い足は伝令として有名だし、それに立派な若者です。あなたの作ったトゥモロコシパンを、すぐに食べると言っています。」何も答えず、揺れる花は早速仕度に取り掛かった。籠一杯、パンが出来上がったのは、夜も明ける時分。朝まだきの光の中を揺れる花は旅立った。真昼に種蒔きの村に到着した。若者たちの競走が彼女の前で始まった。目を丸くして立ち尽くす、彼女のちょうどすぐそばを、捷い足が駆け抜けた。疾風のような速さだった。あっけにとられて揺れる花、そこにしばらく立っていた。目を閉じると、あのときのあの光景が甦える……啾々と松の林が哭いている。濡れた草の上に押し倒されて、身を熱くして震えていた。それから、毛布にすっぽり覆われて闇の中を滑っていく、二つの人影が浮かんで来た。二つの影法師は身を屈め、名もない哀れな存在を土の中に埋めたのだった……。

競走は終わった。捷い足は母の家の前で待っていた。ちょうど木の切株に腰掛けて休んでいるところだった。揺れる花が真ん前に来て、土の上に籠を置くと、捷い足は立ち上がったが、何もものは言わなかった。ただ鋭い射るような目で彼女を見て、籠を取ると家の中に入った。すぐこのあとに種蒔きが戸口に現れて、揺れる花を招き入れた。こんな風に揺れる花は、自分が作ったトゥモロコシパンを、種蒔きの家族と一緒に分け合ったのだ。彼女が家路に就いたとき、日はまだ高かった。自分の村に帰ってくるころ、日はトップリと暮れていた。その夜、深い眠

りの中で揺れる花は、林の中を駆けている一頭の鹿に巡り会った。彼女はその鹿を捕らえようとした。追いかけているその間、彼女の体はふわふわと何度も何度も宙に浮いた。とうとう捕まえた、と思ったその瞬間、スルリ、鹿はその手をすり抜けた。

朝が来た。揺れる花の一族が暮らしている家の前に、捷い足が到着した。家に入る彼を見て、つと立ち上がる揺れる花。青と白の貝殻の首飾りを手に持って近寄ってくる捷い足。やがて両手に持ち替えられた、その首飾りは細い首に掛けられた。揺れる花は呟いた。とうとう私も人妻になった。

揺れる花とその母朝日が、そのほか数家族と暮らしている、この長い家と呼ばれる共同家屋は、すっかり手狭になっていた。そこで捷い足は二人のための新居を持とうと決心した。ほとんどが揺れる花の一族だが、多くの人が若夫婦の家づくりを援助した。樹皮を剥いて作られる、小じんまりした家だったが、数カ月を要して完成し、二人はそちらに引っ越した。

また夏が幾つか通り過ぎた。この家も更に何組かの夫婦が住んだ。ますます増えて来るだろう。もっと多くの人を収容できるように建増しが始まったのだ。しばらくの間こんなことが繰り返されて、この家も他の家と同様の長い家になったのである。

9

次の蕁狩りの季節が来て、揺れる花は男の子を産んだ。母のまた母、祖母、^{スプリング・フラワー}春の花に相談して、この子に^{ガラゴ・タイデング}良報という名前を付けた。産後の床に寝ているときに、外でガラガラと音が鳴った。海亀で作ったガラガラを鳴らしながら外に出て行く兄の姿が見えた。これから^{フォーレス・フェイス}仮面組⁽⁴⁵⁾に合流し甥の誕生を祝いながら村の中を練り歩くのだ。生まれたばかりの良報が、やがて酋長になることを、このとき揺れる花は知っていた。その晩、彼女は小さな仮面を彫って、大事に袋の中に蔵い込んだ。ガラガラ音が聞こえたそのとき、幼い息子が成長して、やがて仮面組を指揮する姿を、この目でハッキリ見たからだ。母となり、ベッドに寝ている揺れる花は、まえよりずっと綺麗に見えた。黒い瞳はますます大きく見開かれて、さらに深い色を湛えていた。遙か遠い未来の彼方を、その目はじっと見つめていたのだった。

10

何度か夏が過ぎていき、良報は強くて美しい若者になった。若い、賢く、冷静だと大人たちには評された。女たちには騒がれたが、まるで見向きもしなかった。それよりむしろ、大人たちの談笑の輪に加わって、いつも昔のことを尋ねたり、部族の法規や言伝えを学ぶことに熱心だった。

ある日、裏手でトウモロコシを挽いていた。そのときだった。表でプスッ、プスッと突き刺さるような音が聞こえて、揺れる花は思わずぞっと身震いした。ス一族征討の遠征で、酋長の

誰かが死ぬことを彼女はとうに知っていたからだ。兄の^{パー・オブ・サンダー}雷鳴が流れ矢に当たって死んだ、という第一報がこの村に届いたのは、それから程ないころだった。

春の花と朝日は既に無く、今では自分が一門の主婦だ。喪報を聞いて、反射的に良報のことが頭に浮かんだ。まだ若い、あの子は聡明だし、身体も強い。それにまた、一門であの子以外に酋長になれるような男は他にいない。

数日後、揺れる花は熊一門の会議を開いた。この会議には数人の男も出席した。しかし、ほとんどは女であったし、この一門の構成員は他にも何人かいるのだが、出席者の大部分は、揺れる花の家族なのだった。全員が揃ったところで、彼女は口を開いた。皆んな急におし黙りシンとして聞いている。なるほど良報はまだ若いです、と彼女は一旦は譲歩した。しかし、これまであの子がやったことを思い返してみてください。あの聡明さ、あの物に動じない性格は、なにより一門の指導者としてピッタリの資質じゃありませんか、と説いたのだ。こうして会議を終える直前に、彼女は兄雷鳴の後継者の酋長候補として自分の息子を指名したのであった。

この後しばらく、揺れる花はイロクオイ部族の他の酋長を訪問して忙しい日々を重ねた。まず^{ザ・フレーザーズ・クランズ}兄弟関係にある一門、さらに^{ザ・カズン・クランズ}従兄弟の間柄の一門の酋長を訪ねた。候補者が、これらの酋長たちに承認されると、最後に連合に加盟する、全酋長の出席する^{ザ・グレート・カンシル}総会議に息子の名を持ち出して、ここに彼女の指名した候補者は承認されたのである。⁴⁶⁾

こうしてその秋、トゥモロコシの刈入れ前、良報は母の兄を継いで酋長になった。

11

何度か夏が巡って過ぎた。奇妙な噂が揺れる花のもとに届き始めた。最初にやってきたのは^{フル・ムーン}満月だった。どうも良報は破廉恥にも、あのスー族と和戦条約を結んだらしいよ、と滔々とその母に向かってまくし始め、それから彼女は断言した。スー族がアルゴンキン族と闘っている間は、良報は自分の影響力によってイロクオイの攻撃を阻止する約束をしたのだ、と。次に来たのは、^{クロッシング・ザ・ロード}捷い足の兄弟の十字路。彼は良報の不可解な行動によってイロクオイ族にもたらされた不名誉について唸々と語った。来る日も来る日も、入れ替わり立ち替わり、大勢の人がやってきて、ほぼ同様の事を熱心に、また激しい口調で揺れる花に告げてはまた帰って行ったのだ。

12

揺れる花は頬蒼ざめ、だんだん^{やつれ}憔悴が目立ってきた。次第次第に痩せてきた。ある日とうとう決断した。私はもはや、母ではない。一家の女主人としてどうしても良報に言うことがある、と。息子であるが、相手は酋長。礼儀を弁え、穏やかな言葉で叱責したのだ。部族のみんなを恥ずかしめるような、不名誉なやり方は改めなさい、と。彼女の最後の言葉はこうだった。飽

くまで抵抗するというのなら、もう一度は待ってあげます。でも、その次のときは、^{チーフ・ウォリアー}戦時酋長⁴⁷⁾にも来て貰います。あなたを退位させるためです。もう酋長ではられませんよ。

数日過ぎたが、その醜聞は相も変わらず消えなかった。揺れる花は、約束通り再び良報のもとを訪れた。彼女が何を話しても、息子は何も答えない。すぐそのあとの三度目は、戦時酋長も同行した。良報と差向い、戦時酋長はこう告げた。「最後の勧告になるが、なおも頑強にわれわれの要求を拒否する気なら、家と一門を取り仕切る酋長としての、おまえの任務を差し止める。おまえの頭からは鹿の角を取り上げるし、大蛇で酋長の象徴のあの木だって切り倒すことになるんだぞ！」こう言いながら、戦時酋長は良報の頭から鹿の角を取ると、揺れる花に手渡した。これでもう、良報は酋長ではなくなったのだ。

その後、揺れる花は総議会に出た。連合の全酋長の前で息子の退位を告げたのだった。報告をする揺れる花の胸は、張り裂けそうだった。いまでは彼女の家の「囲炉裏から燠は消え」たこと、つまり、酋長職を永遠に失ったことを知ったからである。

それから数日して、満月が揺れる花のところにやってきて、こう伝えた。^{フェザード・アロウ}羽毛の矢、つまり彼女の息子が良報に代わって、酋長になることに決まったこと、また連合の酋長たちも酋長職の移動を認めたことなどを、また留め度なく喋っては帰っていった。

その日の夜、毛布に身を包み揺れる花は外に出た。トウモロコシ畑を一望する、小高い丘の上に長い間立っていた。思いは遙かな過去に向かい、遠い昔の回想に彼女はじっと耽けていた……しかし、未来については、もう何も考えまい、と彼女は思った。

アレグザンダー・A・

ゴールドンワイザー⁴⁸⁾

V-3 ゴロゴロ翼の雷電力

私がこれから書き留めようとする不思議な事件は、1840年の夏に起こった出来事である。そのころは、まだ40代の初めて働き盛りの私は、たまたまある博物館の依頼によってニュージャージー州北西部の丘の上に位置する古代レナピ族⁴⁹⁾の墓地の発掘調査に当たることになったのである。

6月10日、墳墓としては桁外れに深い地層に、直径約6フィートの円形の古墳を掘当てた。ついでほぼ地表から7フィート位のところに、石塚の形で積み上げられた、おびただしい^{スラップス}石板を見つけたのだ。

細心の注意を払いながらこれらのものを動かすと、下に一体の人骨が出てきた。丹念に土を払いのけると、これは成人のものであると判明した。右側面を下にして横臥したもので、両膝は身体に直角に折曲げ、両手を顔の近くに置いて埋葬されている。

朽ちかけた胸骨の近くには、小さな石製の仮面が転がっていた。二つの小さな穴が空けられ

ているのは、そこから紐を通して首に吊してあったのだろう。また、すぐそばに赤紫色の粘土質岩でこさえたナイフの刃と、粘土を焼いて作ったパイプ——素材がまだ柔らかいあいだに鋭い刃先でその表面に非常に細かい模様が描きこまれている——がある。

頭蓋骨の両側に、白亜質の貝殻の数珠らしきものが、数個目にとまる。貝殻玉より幾分大きくまた肌理も荒いが、しかし、形はよく似ている。また、両足の付近には、鎌を作り直した見事な出来栄の火打ち道具が積み上げられており、かつては簾が存在したことをも教えてくれる。

いやしくも考古学者であるならば、このような正に新発見の古代の墳墓を前に、誰かじっくりと腰を下ろして、目の前に横たわる肉のない顎骨が口を開き、語り始めるその話しに耳を傾けるのを望まないでおれようか？あるいは彼自ら、過ぎし日に存在した一個の人生について何か知ろうと願い、たとえそれが束の間なりとも時間を遡って旅してみたいと思わないでおれようか？私はまさにそのように腰を下ろし、そのように願ったのだった。私たちは、それから遺跡を発見時のままの状態に戻して写真に収め、そのあと初めてこれらの標本を保存のため、他の場所に移すことにしたのである。

しかしながら、もう時間も遅いので、移動は明日の朝にすることにしてその人骨にはそれ以上、手を触れなかった。従って夜はそのまま石板の間に放置しておくことにしたのである。

暗くなってから私は手帳を置き忘れたことに気が付いた。そして墳墓のそばにある、泥の山の上に置いたままになっていることを思いだした。私は、こちらに近づいてくる雷雨が、ときたま発する稲妻の光を頼りに引き返して行った。手帳を見つけたあとで、キャンプの方に戻りながら、落ちて来る最初の雨の滴を手を受けようとして私は片手を差しだした。まさにその瞬間だった。目も眩むような電光と耳を聳するばかりの音に、激しい衝撃を受けて私はよろめき、その場に倒れ伏して……そのまま深い暗闇の中に引きずり込まれていったのだった……

気が付いたとき、何も見えなかった。しかし、雨はまだ相変わらず降っていることは分かった。パラパラと木の葉を敲く音。それと自分の身体の上に落ちて来る感覚で雨だと知ったのである。

自分の身体だって？なんと、私は丸裸かになっていたのだ！私は胸にさわった。剥き出しになっている。両腕もまたそうだった。いったい衣服はどうなったのだろうか？今度は手を延ばして腰をさわってみた。ベルトはそのままだ。しかし前の方に小さな前掛けのようなものがブラ下がりしており、しかも濡れてヌルヌルしたような感触がある。腿は？私は触れてみた。すると、ほとんど腰まで達するような長い靴下のようなもので覆われているのが分かった。これはさらにサポーターのようなものでベルトに繫げられている。足首もまた、やはり靴下のようなもので覆われて、前掛けのようにやはり濡れて、ヌルヌルした手触りだ。

私が足首にさわろうと身体を折曲げたとき、何かがサッと頬を擦った。冷たくて硬いが、軽

くてほとんど頬にくっついていてような感じだ。私は、手を延ばしてそれに触れてみた。それは、紐か環のようなもので繋がれた小さな数珠のように思えた。

指先で辿ると、どうやらこの環はまた、たくさんの他の環から出来ていて何かの方法で両耳の数箇所^{みみたぶ}に、それも耳朶から上のところでしっかりと固定されている。触ってみてわかったことだが、あんまりたくさんあるために、耳の上端が重みで垂れ下がってしまっていること、また耳朶もいくぶん下に押し下げられているのだ。環に一つ一つ触ってみた。それぞれがしっかりと耳に固定されている。もう一方の耳も同様である。頭を振ると、それらもまたユサユサと揺れる様子がよく分かった。

もう、すっかり面食らって私は、思わず髪を掻き上げようとした——これはわたしがよくやる仕草の一つだった。ところがである。ツルリと指が滑った。驚くべし、何と、私は丸禿になっていたのだ！いや、本当に毛とも言えない、まったく申し訳程度の、ほとんど剃ったといってもいいくらいの代物があるばかり。わずかに額から頭頂部にかけては、まるで馬のたてがみのような剛毛が伸びて、これを後ろで一本に括り、お下げ髪、あるいは辨髪のようにしてあるだけだったのだ！

私が身体を動かしたとき、何かが胸で動いた。触ってみるとそれは、首から紐で吊した硬くて冷たい、小さな卵形の物体だった。すぐ近くにもう一つ、濡れたネバネバする袋が、やはり紐でぶら下げられていた。どうやら、こちらは短剣の入った鞘のようなものらしい。

私はまったく途方に暮れてしまった。いったい自分に何が起こったのだろう。私は座ったままで考え続けた。が、雨の中でそのまま眠ってしまったに違いない。目を開いたとき、こんどは昼間だったので。

辺りを見回した。まだ雨は降っているし、風は梢を揺らしている。しかし、私は何処か見知らぬ未開の地に来てしまったように思われた。それは、私の左手の遙か前方には、谷間が横たわっているのが目に映るが、そこには家も道路も開墾地も何もなく、ただ荒野に木々の梢が揺れているばかりで、実際、ときどき木々の合間から遠く微かに煙とおぼしきものが昇っている点を除けば、人影らしきものもまったく何も発見出来なかったからである。

後ろを見た。大きな木が一本立っているが、樹皮がほとんど剥がれているために、幹が剥き出して白っぽく見える。折れた枝が地面に散らばっている。雷が落ちたのだ。

私は自分の両手を見た。痩せて黄色だ。太ってそばかすだらけの筈だったが。今度は太股を見た。汚れて擦り切れた鹿革の脚絆に包まれている。両足には、甲の真ん中を一本の線の走るモカシンを履いている。この襪の近く、ほとんど色褪せているが彩色を施した模様らしきものがある。しかし、それでもなお、私には、何がなんだかさっぱり分らない。

辨髪(?)を引っ張ってみた。髪の色は黒い。これがきれいに編まれているのだ。私ののは、もともと赤毛だったのだが。両の耳に付いた数珠を引き寄せた。それらは白いし明らかに貝殻

で出来ている。しかし、目との距離が余りにも近すぎてよく見えない。

それから私は首から吊してあるものを調べてみた。すると、卵形の硬い物体は何と、私たちが墳墓の中で見つけたあの小型の仮面だったのだ！私はナイフを鞘から引き抜いた。それは石製、つまり粘土質岩で作られたものだが、あの古びて紫色のものではなく、黒くて真新しく、刃先もまだ鋭い。ついで袋の中身を覗いた。すると、思ったとおり、粘土製の小さな装飾を施したパイプが入っており、何か湿って縮れた葉っぱのようなものが詰めてあった。タバコの葉に違いない。

ここで私は、いやでも認めざるを得ないある結論のようなものに辿り着いたのだ。つまり、私は何らかの事情で先史時代に運ばれてきたこと、そして、先程その遺骨を発掘した、当のインディアンになり替わって私自身が彼となり、その衣服をもまた、身に帯びているのだと。

もし、これが本当なら、私は何か武器を身に付けているに違いない、と考えた。実際すぐにそれらを見つけたのだ。5フィートの真弓が、雷に打たれて折れた立木の枝の下にころがっており、そばに鹿革の箆も見つかった。わたしは矢を引き出した。鏃は石で出来ているが、それを柄に括りつけてある、何かの動物の腱で出来た糸が濡れて緩んでいる。私は、思わず戦士の本能で—— といおうか、指の間に挟んで振り回し、糸をきつくしてしまっていたのである。

一頭の鹿の死骸がまた、落ちた枝の間にころがっていた。明らかに直前にこの弓で射られたものだ。

私は、このとき急に空腹をおぼえたので、箆を投げ出して、弓を拾い上げ、それから一瞬躊躇したが、鹿の死骸を肩に背負って煙の立ち昇る方に向かって丘を降り始めた。

しばらくして小さな道らしきものが右手に続いているのに気が付いた。この道を辿って、とある崖っぷちまでやって来た。彼方には幾つかの家が立ち並び、その樺の樹皮で覆った屋根がよく見える。葉の落ちた枯木が家並の合間から聳え立ち、これが周囲の生き生きした緑の森と実に好対照を見せている。

こうして眼下の風景に心を奪われていたそのとき、ふいに丘を登って来る人々の話し声が聞こえてきた。私はおもわず獲物を背にしたまま藪の中に駆け込み、姿は隠したままで外の様子を観察することにした。声の持ち主は数人の男たちだったが、明らかにこれから狩りに出かけるところであるのは、私のように弓で武装していることから分かった。ほとんど全員が私のものとよく似た、脛当てやモカシンを身に着けている。二、三の例外を除いて髪は私と同じ刈り方をしているし、耳には、これも私のものとさして違わぬ数珠か、もしくは羽毛の房で飾っている。それに、驚くべし何と、私は彼らの言葉がチャンと理解出来るではないか！

このようなことから判断して彼らは私と同部族の連中に違いない、このまま歩みを続行しても大丈夫だ。そこで私は、彼らが行き過ぎたあと、隠れ場から出て、そのまま丘を下って先程の集落へと向かったのである。

最初に私の目を惹き付けたのは、広い空き地、もしくは広場のほぼ中央に位置する、大きな長方形の納屋のような紡錘小屋であった。樹皮を重ねて造り上げた屋根は、何本かの柱で支えられているが、その棟のところに二つの煙穴が空けられている。側面は丸太造りである。私のちょうど正面に当たる出入口は、カーテンのようなもので塞がれていた。

広場を取り囲む15戸から20戸ばかりの紡錘小屋は、いずれも形は同じだが、しかし大きさはまちまちで、中央の小屋の半分から四分の一程度の家が並んでいる。これらのものの屋根には煙穴は一つしかなく、また側面は、屋根と同じ樹皮で出来ている。これらの中には、屋根がそのまま前方に延びて、一種のヴェランダの役を果たしているのもあれば、また母屋とは別に、樹皮で葺いた納屋が単独で前に設けられているものもある。しかし、いずれも側面は吹きさらしで被いがない。このヴェランダや納屋からは、青い煙のもやが立ち昇って芳しい香りが馥郁と漂ってくる。広場の端にいる私のそばには、枯木が一本立っているが、その表面の樹皮は保護されて布で覆われている。他の樹木も彼処^{かしこ}に見えるが、そのそばに幾つか黒ずんだ切株が点在しているのが目に付く。それに広場を取り巻く庭地の枯木は、大部分が丸裸かで、その幹を外気に晒している。後で知ったことだが、敷地や庭を開墾するために、これらの樹木は皮を殺ぎ落とされて枯れても、完全に水分が無くなるまで放置される。そのあと火をかけられ、焼かれた後に切り倒され、必要な折に薪材として利用されるのであった。

ある納屋の下に数人の女が立って足を踏みならすような動作をしている。そこから気が抜けたような音が響いてくる。私はその方へ足を向けた。突然、女たちの一人が喜びの余り、叫びを上げて飛び出してこちらに駆けて来た。「まあ、^{フライング・ウルフ}飛び狼！無事に帰ってきてくれたのね！」彼女は愛おしそうに私の腕を掴み、数ある紡錘小屋の中の一つに私を引っ張って行く。「メングウェ⁶⁰には結局殺られなかったのね。嬉しいわ！」

これがいま、私がその肉体を借りている男の妻に違いない、何か言わなければ。思わず私はこう答えてしまった。

「うん、この通り無事に帰って来たよ！」「まあ！」彼女はさも心配げに私の顔を見上げて「きっとお腹もベコベコでしょうね。昨晚はあなたの好きなシチュエーションにしたのだけどお帰りにならなかったの、坊やも私も手をつけていないのよ。暖めてあげますから、ちょっと待ってね。その鹿はいつものあの場所に吊して、用意が出来るまでベッドで寝ていらっしやいな。さぞお疲れでしょうから。そうそう、昨日完成したばかりの新しい^{むしろ}座を敷いてあげるわね。」

彼女は母屋の中に入っていき、私もその後が続いた。この家でもっとも目に付く特徴は、両面の壁の周囲に沿って張り巡らした一對の広い台、あるいは椅子であった。これは、床から2-3フィートの高さに持ち上げられて座が敷き詰められている。これらの椅子の背後の壁は、彩色を施した壁紙が張り巡らしてある。また、その下の隙間には袋や籠や包などが一杯に詰め込まれている。

女は真新しい座を一方の椅子の上に広げて言った。「さあ、これで横になれるわ。私、これから火をおこしますからね。雨上がりだから随分ジメジメしているでしょ？」

彼女は外へ出て、納屋の棚の上から何か大きな物を下ろしたりしていたが、私が蓆の上で身体を伸ばし寝そべった頃には、大きな卵形の土鍋を持って帰ってきた。それから母屋の中央に暖炉として置かれた三つの石の合間に土鍋の尖った口を突っ込んで、それから長い棒で灰の中を掻き回し始めた。彼女はやっと昨晚の残り火から火種にする燃え殻を捜し出して積み重ね、その上に細かく切り刻んだヒマラヤ杉の樹皮を置いてフーフーと吹き始めた。やがて小さな炎が起こって勢いを増し始めたが、なおも完全に燃え上がるまで、枯れ枝を細かく折って焼べ続けた。炎が鍋の周囲を包むと、間もなくぐつぐつと音をたて始めて、シューシューと芳ばしい香をたてながら肉やトウモロコシ、豆などの煮込み汁が木製のお碗に入れられて私の前に運ばれて来た。

ついで平べったい団子インディアン・ドーナツの入っているお碗がもう一つ並べられた。これは、トウモロコシを潰して莓の味付けをしたものだったが、少々くどいものの、なかなか美味しいものであった。

煮込み汁のお碗の端には、短く幅の広い木製の匙が付いていた。私が食べている間、彼女は向かいの椅子の端に座って楽しそうにあれこれ、返事を待つのももどかしそうに、ひっきりなしに話し掛けてきたのは、私には有難かった。

何回か頬ばる間に私は彼女をとくと観察した。年の頃は25から30歳のあいだであろう。白い歯がいつもこぼれるように覗く、愛嬌のある美しい女性である。それにまだ、ほとんど苦勞も知らないような優しい容貌だ。その黒髪は綺麗に真ん中で分けられ、後ろに束ね、ちょうど項のところで長い円筒形の結び目——たくさんのビーズで覆われている——で留められている。両耳の端からはビーズの環が垂れ、明らかに私の場合と同じく、耳には穴が空けられているのだ。またその耳朶にはおそらく直径4分の1インチ位になろうか、大きな穴が見える。首にはいろんな種類のビーズ——乾燥した莓や種子のようなものから、明らかに貝殻、また銅とおぼしきものなど——の首飾りが架かっている。彼女の豊かな上半身は、これらのネックレスを除けば丸裸であった。腰から下には、豪華な房飾り付きの、色違いの複雑な柄模様を縫い込んだ鹿革のスカートが垂れている。それは、見たところワンピースのように、ゆったりと彼女の腰のまわりを包む衣裳で、きつく締め付けられたベルトにこのスカートの上端が折り重なっている。脚には脚絆を巻き、小さなモカシンを履いている。どちらも鹿革製のもので、後でそれと知ったのだが、鹿の毛を染め、さらに山嵐の針で刺繍されている。左右の手首には、腕輪ブレイズレットが光る。

食事の間にも彼女の話は続く。「お母さまがコーン・ブリンダ・ビレフジ（きび）挽き村から見えておっしゃってたわ。4枚の柔らかい鹿革で今あなたに素敵なお服を作っているところですって。裏地には、あなたの守護霊さまを縫いつけるのに——ほら覚えているでしょ？あのカヌーに乗ってやってきた南

の方の人たち——あの人たちから買い取った小さな貝、あれでお面を作っていच्छるのよ。これまで貯えた薬草は全部交換してもまだ足りないの、今でもまだ、木の根を掘る忙しいビーヴァーみたいに精出して働いていच्छるそうよ。」

「貝は、たとえ一つが取れそうになっても、他のものが外れないように一つ一つ縫い込んでいくの。小さい穴が空けられているのはその為だって。そうそう、交換といえば、お約束のあのチェロキー貝、あれはいつ買って下さるの？ 今、あれを身に着けているのは、^{ネッサム・グランド・ビル}針鼠村のあの、ショウニ族⁵¹⁾のお婆さんだけで、このレナピの部落にはまだ、誰もいないけど、そのために私、耳の穴を大きくしたんだから。」

「それと、作りかけの、あの大鉢、あれはいつ完成するの？ 楓の木瘤は、ずいぶん前に持ち帰って下さったけど、まだほんの一部を焼いただけでベッドの下にころがったままでしょ。そばに石板と、^{やすり}鑪の砂岩がたくさん置いてあるわ。」

「^{ひうちいし}燧石がまだ出来ないのは、鑪がないからでしょ。それは、よく分かっています。でも作りかけの鑪と原石は、乾燥を防ぐために納屋の隅っこに埋めたのは覚えている？ もう十分に湿っているから鑪はすぐに出来上がるわ。」

「いますぐそれが必要なわけはね、先日私の目の届かないところで、あの子がカヌーで遊ぶために大鉢を持って行ってしまったからよ。三、四人の男の子が入るまではまだ大丈夫だったんだけど、それから急に二つに割れてしまったのよ。あれは、父と母が最初に家を建てたときの記念にお爺いさんが、母のために作ってくれたものだから、本当に悲しいわ。今晚はもう、どうにも代わりのを借りなくちゃならないのよ。」

それまで私はできるだけ口を挟まないようにしていた。理由はむろん、何も知らないことを隠しておきたかったからであるが、同時に私が実は、本物の主人ではないことがバレて、彼女の幸福をブチ壊してしまいたくなかったからでもある。しかし、ここで敢えて尋ねた。

「今晚は、いったいなにがあるんだね？」

「そうそう、忘れていたけど」彼女は答えた。「昨晚あなたの留守中に戦時酋長が、うちの村や他の村の長老たちとご一緒に会いに来られたの。ほら、あの最近めっきりうるさくなって来た、メングウェの誅伐隊を組織するつもりなのよ。昨年私の兄が狩猟の最中に向こうの^{スカム・ビィング・パーティーズ}頭皮狩り団に捕まって殺されたのを覚えているでしょ？ それにあなたのお友だちの^{ブレイカー}壊し屋が殺されてから、まだ二月にもならないわ。だから昨晚あなたがお帰りにならなかったの、てっきりあの連中に捕まったのでは、と心配したの。」

「戦時酋長は、レナピ族の中心、我々ウナミ⁵²⁾の中で誰よりも北の道をよく知っているあなたに、全軍の指揮を任せたい、とおっしゃってたわ。みんなあなたの判断力と勇気を大変信頼しているみたいだった。それはとても危険な任務だし、あの子も私もまだしばらくは猟師が必要なので、今あなたに行かれては困るんです。でも私は兵士としての、あなたを大変誇りに思

っています。それにこの村もあなたを必要としているんだし、それに死んだ兄の亡霊も、かたきを討ってくれと泣いて頼んでいますからね。」

「今晚もう一度来て下さいと言ったので、たぶん来てくれると思います。それに部族の大酋長まで引っ張ってくるとも言ってました。ちょうどあなたがお帰りになってこの村の中に入ってきたときは、お料理を手伝ってくれそうな人を物色していたのです。あの^{あづまや}四阿でトウモロコシを挽いていた人たちの中からね。」

彼女の話が終わったとき、私はついにこれまでだ、と観念した。もうこれ以上隠し通せるものではない。代表団と話し合うほど私は部族のことを知っているわけでもないし、ましてや、誅伐隊を指揮することなど出来るはずもない。彼女に本当のことを話さないといけな。少なくとも彼女が理解出来る範囲のことを…。

そこで私は言った。「ねー君、よく聞いて欲しいんだ。僕が帰ってきて大変喜んでる君の今の幸福を台無しにしたいくはないんだがね。実は、昨晚何か僕の身の上に起こったらしいんだ——それがどういうことなのか、自分でもよく分からないんだけど——とにかく、今朝目が醒めたとき、これまで知っていたはずのことが何も思い出せない。自分が身に着けている物が何なのか、また自分の身体さえ自分のものかどうかどうかも分からない。飛び狼という名前も君が呼ぶまで憶い出せなかった。この村までの道は偶然見つかったし、君が僕の妻だということも、君の動作でやっと分かった。しかも今でもまだ、どうしても君の名前が憶い出せないんだよ。忘れなかったのは、どうやら日常話す言葉だけらしい。誅伐隊の指揮とか、大鉢を作ることとか、狩猟などはとてもムリだ。やりたくないからじゃなくて、やり方を忘れたからなんだ。」

彼女は椅子から下りると、飛ぶようにしてまっすぐ私のところまでやってきて私の両肩に手を置いた。そうして私の目をのぞき込んで尋ねた。「それ、本当のこと？ 飛び狼」

「ほ、ほんとうだよ。」私は慌てて答えた。

彼女は戸口まで歩いて行って、しばらくの間黙って外を眺めていた。再び私のところに戻ってきたときは、両の頬が濡れていた。「きっと」彼女は言った。「あの子に会えば記憶も戻ってくと思うわ。いつもあんなに可愛がっていらしたんだから。」

彼女は出て行って、程なく8才くらいの利発そうな少年を連れて帰ってきた。長い黒髪がゆるやかに、そのしなやかな裸——首飾りを除いて——の体を覆っている。私は経験上、それが亀の小さな骨から出来ているのを知っていた。

「父さん！」子どもは叫んだ。「どうして母さん呼びにやったの？ みんなで川遊びをしてちょうど面白いところだったのに。角のある水蛇を見つけて雷さまごっこしてたんだよ。」私はこの子の頭に手を置いて言った。「よしよし、いい子だな。それじゃ、いまからまたタッピー遊んでおいで。」私は母親の訝しげな視線を浴びて頭を振った。

しばらく気まずい沈黙が続いたあと、やっと女が口を開いた。「今朝は何処でお目覚めにな

ったの？」

「向こうのあの丘の上の」わたしは指で示しながら答えた。「木の下だよ。もう一度行ったら何処だか分かるよ。その木の皮が落雷に会って剥がれ、白い幹が剥きだしになっていたからね。それまで最近のことに違いない。折れた枝がその辺りに散らばっていて、葉っぱの色がまだ緑色だったから。」

「まあ、それでよく分かりました！」彼女は叫んで飛び起きた。「あなたは雷の矢玉に打たれたのよ。でも治してくれる人知ってるわ。」と言うが早いか脱兎のごとく走り出た。

女は、立派な顔立ちの初老の紳士と一緒に戻ってきた。鉄灰色の髪が肩まで届く、総髪である。ただし、後頭部は一本に束ねて背後に垂らす、いわゆる辮髪にして、大きくて美しい鷲の羽毛——これは白く、先のみが黒い——で何箇所かを結んでいる。両目の端から明らかに入れ墨した青い線が、頬をジグザグに走り、顎にまで達している。裸の胸にもまた、稚拙ではあるが、しかし大変印象的な、翼を広げた鳥の姿が彫りこまれ、無数のジグザグの線がこれを取り囲んでいる。首には先がボールのように丸くなり、赤い色を塗った棍棒——ただし、そのミニチュアである——を吊した紐が架かっている。

「こちらがまじない師のゴロゴロ翼よ。」^{ランプリング・ウィングス}妻が言った。「この方以外にあなたの病気を癒してくれる人はいないわ。」そこで私は妻にした話を繰り返した。

男はしばらく考えていた。それから彼女の方を向いた。「あの泉までひとつ走りしてくれないか、^{ウイスバリング・リーフズ}囁く木の葉よ。」と彼は言った。「そして綺麗な水を少し持って来ておくれ。」

妻が樹皮で作ったバケツを持って出て行ったあと、彼はこう述べた。

「わしの考えを言おう。あんたがその体に入り込んだ飛び狼は、雷さまの矢玉に打たれて死んだか、気絶したかどちらかだ。そこへあんたの魂が、おそらくその辺を浮遊していたのじゃろうが、入り込んだという分けじゃ。あんたが何処の誰か、わたしには一向わからんが、でもさぞかし、わたしのことやら、わたしの時代のことを、そのとき考えていなさったんじゃろう。じゃからこそ、また別の雷さまの矢に打たれて、魂がおん出されてしまうたんじゃろう。囁く木の葉にはこのこと、つまりじゃな、あれの本当の亭主は死んだかも知れん、などとは絶対に言うてはならんでな。」

「ところで、これからあんたはどうする？わたしの国で暮らす決心をしてあの女の夫として当然期待されることを覚えることも出来るじゃろうし、またいつかわしと一緒にあの丘に行けば、わしが雷さまに呼びかけてあんたをもう一度自由にするように願うことも出来るが。それなら多分、あんたの身体がまだ壊れていなければ、そこに帰ることが出来るじゃろう。それに飛び狼の魂が死者の国に旅立っていなければ、元の身体に戻ることも出来るでな。すべては運次第じゃ。今晚、長老たちや大酋長がやってきたときは病気のふりをして、床に臥して何も言いなさるな。わしが説明してあげる。これからのことは、じっくりと考えて、いよいよ決心が

ついたら、そのときは、わしに知らせて下され。その間あんたは、できるだけいろんなことを覚えて、女房と息子の面倒をみてくれりゃよい。」

ちょうどこのとき、囁く木の葉が——嬉しや、やっと妻の名前が分かった——水桶を運んで帰って来た。老人は、瓢箪の柄杓に水を汲んで私に振りかけ、残りは自分で飲んだ。

「ありがとう、囁く木の葉よ。あんたの旦那は雷さまに打たれて記憶を無くしておる。優しくして上げなさい。徐々に記憶は戻ってくるよ。じゃが、最初からあんまり多くの期待をしちゃいかんよ。食料がなくなれば、わしの家内に知らせなさい。それから、あんた、飛び狼よ。」老人は私の方を向いた。「何か分かんところがあったら、わしの家に来なさい。夜はいつでも空いているから。」こう言い残して出て行った。

私は囁く木の葉を見た。彼女も私をじっと見た。希望がその顔を明るくし、微笑が浮かんできた。私はますます好感を覚えた。

初めてゴロゴロ翼を訪れたその晩、彼の奥さんが産を私のために広げてくれ、これから近所を訪問するようなことを、もぐもぐ呟きながら出て行った。私はこのときまでにレナピ族の礼儀というものが分かりかけていたので、初めから聞きたいことは切り出さず、しばらくはあれこれと当り障りのない会話を交わしたあとで、こう切り出した。

「私が雷の矢玉に当たったと聞いて妻は、なぜ真っ先にここにやって来たのですか？それとご老人は、どうして雷神族に呼びかけて私の魂を自由に出来ると思っているのですか？」

「これはまた、難しい質問じゃな。」ゴロゴロ翼は、しばらく考えてから重い口を開いた。「それにこの類の話題は、レナピではあんまり口にされんことでのう。じゃが、あんたは、ここの子供らが受けるような教育は受けとらんじゃから、分かってもらうには、ありのままに話すよりほかはない。きっと、わしの守護霊さまもお許し下さるじゃろうて。」

「まず第一に、^{サンダー・ビーイングス}雷神さまご一族というのは、あの偉大な大霊を支える強力な諸々の精霊であって人間の姿をしているが、同時にまた鳥の形をもしておる。雨を降らして作物を伸ばし、大地を生まれ変わらして下さるのは、この方々じゃ。あんたも嵐のときは、ゴロゴロ鳴る羽音を耳にするじゃろ？それから焰の矢を大地に放つのを目にするじゃろう？あれは日々の糧にする角蛇やら、人間に被害をもたらす怪物どもを雷神さまご一族が捜していなさるところなんじゃ。あんたがレナピの一員として暮らすようになったのも、まさにその矢のうちの一本が当たったからなんじゃよ。」

「ところで言とっかにゃならんが、これら雷神さまご一族のお一人がわしの守護霊なんじゃ。だからみんなわしが雷の親戚で雷電力を持っていたりとか言うておる。今度のことでわしが呼ばれたのは、実はそういうわけじゃよ。」

「わしが、ゴロゴロ翼という名前で通っていることからもお分かりじゃろうが、雷神さまご一族は、生まれる前からもう、このわしに特別な好意を下さろうと決めていなさったに違いな

い。」

「母が兄——つまりわしの叔父だな——に話をしたらしい。身重になった、とな。わしらのところの習わしで母は、叔父にこれから見る夢には、特別気を付けて欲しいと頼んだ。生まれて来る子供に付ける名前のことでじゃ。それから間もなくある夜のことで、叔父は村からかなり離れたある場所にいた。にわかに嵐になり、辺りは真っ暗になったので、叔父は、とある大岩から底のように突き出た岩棚の影に身を寄せた。その場所は濡れてはいなかったが、ザラザラしてあまり居心地のいいところではなかったのだが、なにしろ疲れていたもので寝込んでしまった。深夜、なにかの物音で目が醒めた。何事かと思って、身を起こし耳を澄ますと、彼方の山中で遠雷が響くような、ゴロゴロいう音が聞こえていた。それがいつの間にか、何か人の話す声のようなものになった。「ゴロゴロ翼じゃ。ゴロゴロ翼がやってくるぞ！」叔父は帰ってこのことをわしの母に話した。そのあと間もなく、わしが生まれた。」

「秋の大祭が、あの大きな^{ザ・ビッグ・ハウス}村民館——ほら、あんたがここに来るとき通り過ぎた広場の、あの大きな建物じゃて——行われるときになると、叔父がわしを抱きながら^{ザ・センター・ポスト}聖なる御柱の前に立ち、その上に刻まれた偉大なミシングの顔がわしを見下ろす中を、赤ん坊の名前はゴロゴロ翼である、とみんなに発表した。折柄、^{ザ・ムーン・オブ・フォーリング・リーフス}木の葉舞う月の風が、村民館辺りの木々の間を唸りを上げて通り過ぎた。と、遠くで雷さまの羽音がゴロゴロと聞こえてきた。雨の滴がパタパタと樹皮で葺いた屋根を叩き、二つの煙穴からヒューヒューと吹き込んで下の炉火を大きく掻き立てた。」

「囁く木の葉も話したと思うが、わしらのところじゃ、生まれた子供の性格と、へその緒の始末の仕方とは関係があると昔から信じられておる。女の子ならへその緒を家の下の地面とか庭に埋めれば、家事が好きになるし、男の子ならば、森の中へ隠せと。そうすりゃ、狩猟を好むようになると言われている。じゃから、わしの場合、親父に連れられて森の中へ行き、中味が、がらんどろになった木を見つけ出して、その中に隠したよ。その途端に、雷雨が襲ってきたので、物陰に避難した。家に帰る途中、へその緒を隠したその木の空洞を覗いたら、燃えていたそうじゃ。雷さまの矢に打たれたんだな。」

「子供の頃のわしは、雷さまの力については、何も知らなんだ。ただ大きな黒い雲の周りを黄色い環が取り巻いて、西の方向に盛り上がるような塊が出来たら、村のみんなは年寄りも若いものも、恐ろしげに眺めておったが、ただわしのみは、平気じゃった。実際、ゴロゴロのたびに裸で外に飛び出したもんじゃ。雷さまのゴロゴロはわしにとっては、音楽のようなものじゃし、稲妻は美しく、土砂降りの雨は、爽快だったよ。それにここまでやって来れたのも、みんな守護霊さまのお助けあつてのことじゃから、こうして両手を挙げて、雷さまに感謝するわけじゃよ。」

「でもな、正直言って守護霊が実際にどなたか、はっきり分かったのは、12回か14回雪を

見てから後のことだよ。両親が奇妙な行動を取り始めたのも、ちょうどこの頃だったな。わしに対して何かと意地悪く当たるんだ。その理由がまた、さっぱり見当がつかずに、随分寂しい気がしたものだ。食事でも一番まずい部分や、トウモロコシパンなら屑とか、食べ残しだし、臭くなり始めたシチューとかをわしに食わせる始末じゃった。」

「ある朝、明け方に胸を棒のようなもので叩かれて、わしは目を覚ました。—— いや、その痛かったこと！今でもよく憶えているよ——すると親父が怒鳴ってた。『このしょうもない息子をここから追い出さねばならん。もう我慢できんぞ！早く起きろ、この犬ころ奴！』もう一度ぶたれたよ。母は、つい最近まではどんな喧嘩でもわしの肩をもってくれたのに、何も知らん顔をして炉端に屈みこんでいた。間もなく火が起こって小屋の中が明るくなった。母はそれから扉のすぐそばの水甕のところに行って、家で一番古く黒ずんで脂ぎった瓢箪の盃で水をすくった。それからわしの方を向くと、いつもはとても優しい顔が恐くて燧石のように硬く見えた。『さあ、飲むんだよ。』と命じてわしにその盃を手渡した。何のことか分からなかったが、わしはその言いつけに従った。」

「それから父は、小指の大きさ程しかない、焼けてちぢんだ肉片——それは床に落ちて泥にまみれていた——をわしにくれてこう言った。『さあ、これを食ってさっさと消えてしまえ。このみっともない餓鬼たれ奴！』」

突然、怒りがこみ上げてきて、わしは口一杯に頬ばった食べ物をプッと父の顔に吐きかけて、脱兎の如く出口に殺到した。「待て！」父の声が追いかけてきた。「おいおい、おまえは、顔を黒く塗るんじゃないかったのか？それにまだ、話は終わっておらん。いいか、立派な土産がなければ、この家の敷居は跨いじゃいかんのだぞ！」それからその厳しい顔にさっと笑みが広がったではないか？たしかにその目は瞬き、涙で潤んでいる。

「そのときになって、ようやくわしにも一切が明らかになった。それまでのあの不可解な、両親の行動のすべてがな。わしももう、断食の修行をする時期にきていたんだ。ある超自然的な力を得るためにね。虐待されたと思っていたが、実はこの家を追い出された哀れな子供に天の神々の同情を引き寄せ、生涯にわたって保護してくれる守護霊をわしが見つけることができるように、幻を見れるようにと、両親が仕組んだ芝居だったんだ。たしかに年上の男子から、それらしい話を聞いたことはあった。でも他ならぬこの自分がいま、その試練に直面しているのだとは、ついぞ気づかなかったんだ。」

それから父はこう言った。「家を追い出された子供たちの中には、東へ向かってその行き止まりの^{ウルフ・マウンテン}狼山に登ったのもおるそうじゃ。寝るには都合のよい小さな洞穴があって、祈願するにはもってこいの場所らしい。木のとっぺんからは川も、その向こうの丘もよく見えるからな。それと、わしは明日の朝早く、あの辺で狩りをするから、誰かその洞穴に隠れているかどうか、確かめることにするよ。」

事情が飲み込めたわしは、父の指図に従い、母が見守る中を炭を塗って顔を黒く汚した。それから一番古いボロボロの服を見つけて——文字どおり犬が寝台の下で寝るときに使うやつ——肩にかけて出発した。」

「丸二日わしはその洞穴の中で寝ころんでいた。空腹と戦いながら。この間森の方からは蚊や鹿の蝇、服からは犬の蚤に情け容赦なく咬まれて苦しんだ。しかし、なんとか平静を保って谷間を見下ろし、天にいる方々のお慈悲をひたすら祈願したんだ。しかし、何事も起こらなかった。ただ徒らに一日が過ぎて行ったのだ。黒い雲が背後の狼山を覆い、空一面に広がってそれからゴロゴロ鳴って飛び過ぎていったけど、雨は一滴も落ちなんだ。その晩依然として空腹に苦しみながら、わしは寝苦しい夜を過ごし翌朝を迎えた。明け方に父が一切れの肉と瓢箪の水筒を持って姿を見せた。はしばみの実の栓を抜いて水をごくごく飲む姿を見ながら、父はわしに尋ねる。『まだ何も見ないかい?』『いいえ、何も』と答えると、父は水筒を取り上げ帰って行った。同じことが二日間続いた。絶食のためにわしの身体は衰弱してきた。しかし、午後になって黒雲が湧く以外何の変化もなかった。」

「四日目の午後、雲が再びやってきて雨と雷を運んで来た。すると不思議なことに、わしは赤ん坊のようにすやすやと寝入ってしまったんだ。夢の中でわしは、ザ・グレート・ウェザー・ウェイズ・7・デイズ・7・デイズ日出づる大河のそばの砂丘の上にただ一人、手には先が丸く、赤く塗った木製の棍棒だけを握って裸で立っていた。そうこうすると、空中を四方八方から何本かの矢が走って来てわしの頭の先をかすめたかと思うと次の瞬間、大音声とともに地面に突き刺さり、天地を震動させた。しかし、このわしには指一本も触れなんだので、何の恐怖も感じなかったよ。」

「そのとてつもない雷音でわしは夢から醒めて目を開けたら、ちょうど夕立が美しい七色の虹を伴って谷間を通り過ぎて行くところだった。洗面作ったお日さまから無数の光の輻が放たれて、その夕立の後を追いかけて行く。」

「わしはすっかり満足してこれで家に帰ってもよいという気がしたんだ。これ以上この洞穴にとどまる必要はないと。それで弱った身体を励ましながらか、また丘の山腹に生える濡れた藪に足を取られながらも、家路についたよ。増水した川では足を滑らしながらも、何とか村まで辿りついた。わが家に足を向けるわしの姿を見て村人たちはみんな興味を持ったようだった。」

「親父は戸口に座って焼きを入れた大鉢の中を炭で磨いていた。誰が知らせたのか、あるいは、そのときわしの足音が聞こえたのかもしれないが、父は目を上げた。」

「おう、坊や！土産は持って帰ったんだね？」わしの返事にたいそう満足気で入口から顔を出していた母を呼んだ。『母さん！家の中を綺麗に掃除してこの子の座る場所を作ってやってくれ。立派な、お土産を持って来たんだよ！』母は慌ててバタバタと中を掃き清めると、にこにこしながらわしのために新しい蓆を広げてくれた。わしは驚いたよ。母のふるまいには、わしに対する敬意が溢れているではないか！腰を下ろしたとき、ちょうどお日さまがこの世の果

てから姿を消した。それからまだ湯気を立てている美味しいシチューの入った大きなお碗が運ばれてきた。新しい綺麗な瓢箪に入った真水も一緒にね。」

「その晩わしは両親から大事な客のようにもてなされた。父はわしのために自ら煙管に煙草を詰めてくれたもんじゃ。それから母が深い寝息をたてて熟睡し始めたとき、父は早速訊ねてきた。『それでどんな動物が——あるいはマニトウかも知れんが——おまえの守護霊になってもよいと言ってくれたのか?』わからない、とわしは答えた。それから夢のことを話したが、そんなことは何の意味もないと叱られはしまいかと、内心ビクビクものだった。

「息子よ、おまえはわしらが期待した以上によくやったよ。天界には、強力な霊が数々おられるが、あの雷神族のお一人を味方にするとはな。」何故分かるの、とわしが聞いたら、こんな答えが戻って来た。『先が丸く赤い棍棒は、雷神さまご一族のシンボルなんだよ。つまり、あの強力で致命的な一撃を表しておるのだ。おまえがこの棍棒を握ってその間、矢玉によってまったく無傷だったことは、守護霊である雷さまが、これからおまえをずっと保護して下さるということだ。分かるかな?』

「その夜のことだ。一晚中夢の中でわしは姿の見えぬ誰かと取っ組み合い、格闘していた。じゃがその間ずっと自分の唱う歌を聞いていた。

わたしは艱難辛苦の極みにあった
わたしはその艱難辛苦の極みの中で
わが「救い主」に呼びかけた。
答はあった
それは暗い空より
ゴロゴロ　ゴロゴロ
落ちて来た。⁵³⁾

「このとき以来この歌がわしの人生での応援歌となった。だから毎年村民館で行われる、あの秋の大祭では、わしはいつもこの歌を披露しておるのじゃ。つまり、あそこは祝福されたものだけが、自ら見た夢や幻を唱うことが出来る晴れの舞台なんだ。」

ゴロゴロ翼が語り終えて私は訊ねた。「それでいつもあなたの首にはその小さな赤い棍棒がぶら下がっているんですね。それでお聞き致しますが、同じようにわたしが小さな石の顔をぶら下げているのは、どういうわけなのでしょう? 何度もはずそうと思ったんですが、囁く木の葉がどうしても許してくれないんですよ。」

老人は答えた。「それはのう、この世にましますお面の魂、ミシングウワリクンのお姿なのだ。じゃがのう、同時にこの魂は強力なマニトウでもある。というのも、大霊が森の全動物を

支配するような力をお与えになったからでな。この方は、いまあんたが、その身体を借りている飛び狼の守護霊なんだが、あれが夢の中で見たはずの内容については、わしには語ることはできん。飛び狼以外は誰にもできんことなんだ。あれは、いまどこにいる？あんたはその身体を借りているわけじゃが、ミシングウワリクンのお助けがあんたにもあるかどうか、わしにはわからん。飛び狼の獵師としての名声は、すべてこの大霊のご加護あつてのことじゃとわしは信じている。だから、それがなければあんたも飛び狼の評判を維持してやって行くのは、難しいことかも知れんのう。」私もまったくその通りだろうと思わざるを得なかった。

また別の夜のこと。私はゴロゴロ翼の守護霊が、その後もなお助けてくれたかどうかを訊ねた。

「数え切れないほどだ。例えば、わしが20回目の雪を見たときなどじゃが、レナピ川のもっと上流の、ほら、あの北東の山中にいるミンシ族⁵⁴⁾——これはわしらの盟友だが——を親戚のもの数人と訪れたことがあった。あんたも聞いたことがあるだろうが、言語はわしらのものと少々違うよ。でも同じレナピ族を名乗っていて生活習慣もほとんど変わらない。で、そこからこの人たちも加わって東の方角に山越えをした。たびたび噂に聞いたモヒカン族⁵⁵⁾が近くに住む、あの大河を見ようというわけじゃ。その川に着くと、向こう岸のモヒカン族の村に入りたいと思い、合図の狼煙を上げたが、その部落からは誰もカヌーに乗って出て来るものはいなかった。北風は激しく、おまけにその広い川は荒れて浪が高かったからだ。そこでわしは、煙草の葉を燃やし、守護霊さまに祈りを捧げた。すると、やがて西の空に雷雲が起こって、西風が立った。それで北風の力は死んで、川浪は鎮まった。モヒカン族のカヌーがこちらに向かってくる。わしらはこの村で歓待を受けて何日も滞在したよ。毎日毎晩宴会に呼ばれて踊りを踊ったり、いろんな人の小屋を訪問した。彼らの言語はミンシ族のものと非常によく似ており、わしらのものにもかなり近いので、お互い理解するには何の障害もなかったよ。」

「またあるとき。わしらレナピ族の遠征隊が、サスケハノック⁵⁶⁾というメンゲ族に近い部族の征討に出かけたときじゃ。この部族は、^{マディ・リバー}泥の河の流域にあって、大きな集落に暮らしている。おまけにその周囲ときたら、人の背丈の二倍はありそうな、先の尖った杭でほとんど隙間もないくらいに、もうびっしりと、張り繞らされているんだ。わしらは何度も何度も攻撃したが、何としてもこの砦を突破することは出来なんだ。火討ちにしようと薪を積んだが、相手の射手に阻まれてどうしても落ちん。」

「ついにわしらは、やむを得ず一旦退却することになり、軍議を開いた。すると隊長がこう言うんだ。『ゴロゴロ翼よ、おまえだけが頼りだよ。ここの連中にはずいぶん長い間苦しんで来た。おまえの守護霊に呼びかけてなんとかこの村を攻略できるよう頼んでくれないか？』見渡す限り雷雲がまったく見えないので、わしはまじない袋から大角蛇の鱗を取り出し、入り江のそばの岩の上に置いたんだ。雷神さまのご一族はこの大蛇がお嫌いなことはわかるじゃろ

う？ちらっとでも川の表面に姿を現したら、いつも雷雲が集まってくるもんじゃ。こんな鱗一つで雲を呼び出せることができるもんじゃから、必要とあらばいつでもこれを使うことにしとるんじゃよ。」

「たちまち西の雲は暗くなり始めた。そこでわしは火をおこして、その上に煙草の葉を燃やしてお供えをし、守護霊さまに祈りを捧げた。」

「空はますます暗くなってきて、辺りは夜のような暗闇になった。この巨大な黒雲の塊の上をかすめて過ぎる黄色い雲さえ見えんほどになった。地表の近くは非常に暑くて蒸せ返るくらいだ。突如として大粒の雨がぽつぽつと落ちてきて、それから篠つくような大雨が森の方に近づいてきた。と思う間もなく、これがまた、滝のような豪雨となってわたらの頭上に降ってきた。」

「どのくらい長くこの雨が続いたか覚えていないが、降り始めと同じように突然ピタリと止んで、大きな霰に変わった。これがまたあまりに大きな霰で、向こうの敵の村の屋根という屋根の樹皮を叩く音がこちらの耳まで届くくらいじゃったよ。それから南西の方からゴロゴロと鳴り始めて、だんだん大きくだんだん近くに聞こえてきた。と突然、木の枝や葉っぱなどを巻き込んだ大きな雲のような塊が、わたらのすぐそばをかすめて、大地を震わすような轟音をたてて村のど真ん中を打ったかと思うと、たちまちそいつは姿を消した。わたらはこの目でハッキリと見たよ。それはまるで巨大な一撚りの長い髪の毛のような竜巻が、地上の家や樹木をあっという間に根こそぎにして、大地の上を引きずるように上空へと運び去ったのだ。」

「嵐が通り過ぎて見ると、丸太の柵や敵の村の大部分の家が倒れていた。だが、ちょうどそのとき、車軸を流すような大雨がやってきてわたらは一步も先を進めなかったが、とうとうその村の中に入り込むと、サスケハノックス族が何人も、崩壊した人家の間に倒れている。助かったものは、雨が通りすぎた森の中に逃げ込んでいた。」

「負傷者の中で、傷がひどくて連れて行けないものは、素早く処理して残りはすべて捕虜にした。さらに武器、煙管、衣服、装飾品などのすべてを奪ってわたらは家路についたのだ。こんな具合にこのわたしの名前が知れ渡り、また、こんにちこうして高い地位におられるのも、みな守護霊たる雷さまの御加護あつてのことなんじゃよ。」

「捕虜はその後、どうなったかと聞きたいんじゃろ？これまでの仕返しに拷問を加えて殺したのは、ほんの数人で、何人かは獄死した。あと何人かは一、二年後に逃がしてやったし、他のものは、ここの村のものと結婚してわたらの一族になっている。旅鴉トラベリンガ・エブリウェアのおかみさんを知っているだろ？あれはそのときの捕虜の一人で、旅鴉の両親の奴婢になった。まだほんの小娘のころだったよ。旅鴉が少し年上でな。レナビの言葉を教えるのに、とても熱心じゃった。相思相愛という仲になったので結局所帯を持たせることにしたんだ。どう？見かけはほとんど区別つかんじゃろ？」

私にとって、こうしたレナビ族の信仰とか伝承に関する事柄は、きわめてたやすく、また簡単に理解できた。それに引き換え、日常の、こまごました実面的な方面においては、まったく悲劇的なほどヘマの連続だったのだ。熟練した獵師から弓の技術を習いはしたが、どうしてもコツを会得できなかった。鹿一頭を射とめるのが容易でなかった。ご近所の人だって私の家族のためにいつまで肉を分けなければならないのか、いささか、うんざりしてきたようだった。

これに反して妻の方は、自分の義務を完璧にこなしていた。囓く木の葉のやることなすこと、すべて最上で、そのためにこちらの欠点がよけい目立ってしまうのだった。おまけにこちらが得意とする園芸に関しては、指一本だって動かすことができない。「庭仕事は、男の人のすることじゃありません。」というのがその言い分なのだ。「あそこのご主人、女の仕事しかできないのよ、なんてご近所の噂になりたくないですからね。私が大弓を背負って村を出て行くところをご覧になれば、あなたどんなお気持ちになって？それともカヌーを作るために丸木を焼いているところというのは？ここでは男も女もそれぞれ仕事を分け合っているし、どっちも同じくらい大切に重要なものだから差別なんて全然ないのよ。天気が好くても悪くても毎日狩りに出かけるのと、畑を耕すのも同じくらい難しいことですものね。近所の人たちが、『囓く木の葉は亭主の飛び狼にスカート履かせて、自分は、長脚胖と腰布を身に着けた方がいい』なんて言ってるのをあなた、どう思い？」

私にはあの木製の大鉢を作るのさえ、うまくいかなかったのだ。いろんな人のやり方を観察して、これなら、なんとかかなりそうな自信もあったのだが。熱く熾った燃え殻を楓の瘤の上に載せて、充分な深さに達するまでに焼いたあと、貝殻や鋸の破片で繰り返し削る。それから砂岩で辛抱強く磨きたてる。終わったときは、初心者にはなかなかの出来だと内心ほくそえんでいたほどだった。囓く木の葉も出来上がった大鉢を前にしてにっこり笑い、やさしい言葉もかけてくれたのに。だが、二、三日していざ客を迎えたとき、何処に藏ったものやら、近所から借りて済ましてしまったのだ。

私が傷ついたのは、妻の装身具が少しずつ消えて行くのに気付いたときだった。明らかに毎食の肉のために、またモカシンや日常の衣類を作るための獣皮と交換しているのだ。最初に植物の種子から作った数珠、ついで動物の骨、それから貝殻のリンクが消え、最後に銅製の数珠のみが残った。ある晩、家宅した私は、とうとうそれさえもなくなったことに気付いてショックを受けた。またある日、捜し物をして、ふと寝台の下に手を差し込んだ私は、妻が大事な装身具をしまっている、四角い籠を引っ張り出した。一番綺麗な刺繍とか、祭礼用の衣装などを収納したものだ。その籠がずいぶん軽くなっているのに驚き、私は中を覗いてみた。そしたら何と空っぽだったのだ！

息子が泣きながら戻ってきた。わけを聞いたら、友だちから「おまえの父ちゃん、ヘンだから遊んでやらない」と言われたのだ。

ある晩、ゴロゴロ翼が私に言った。昨晚夢の中で飛び狼の霊を見た、見知らぬ国で暮らしている、家に帰りたいと言っている、と。しかし、ついに危機が訪れた。15日続きの不眠の末、疲れ切った私が、ある晩家に戻って来たときだ。囁やく木の葉が泣いている。

わけを聞いてもどうしても言わない。しかし、私の懇願でとうとう口を開いた。「あなた、もう、うちには、何も食べ物がありません。もうダメだわ。お母さんが作って下さった服を売る以外に手はありません。わたしの大事なものはとっくの昔に処分したので、もうそれしか残っていないのよ。」

私は彼女を引き寄せ、しばらく強く抱きしめていた。それから家を出て、夜の闇を駆け抜けて、ゴロゴロ翼の小屋まで来た。その戸口を敲きながら叫んでいた。「決心が着きましたよ。もう、これまでです！」

気がついてみたら、私は雷が切り裂いた木の下に倒れていた。

私がこの現代の世界で、元の位置に戻るのにそう長くはかからなかった。しかし、今でも西の上空に雲が集まり、雷がゴロゴロ鳴り始めるとき、いつもあの、別れた妻の囁く木の葉のことや、友人ゴロゴロ翼のこと、また彼のあの偉大な雷電力のことなどを憶い出しては、悲しい気持ちになるのである。

M. R. ハリングトン⁶⁷⁾

訳 注

- 1) 「まじない師の家」 the Medicine Lodge 先住民のシャーマンが弟子を「教育する」学校のような施設。志願者はここで先輩シャーマンの手解きを受けて、さまざまな儀礼や試練を「通過」し、シャーマンになる資格を獲得する。「シャーマンになる方法は基本的には二つあって、①神や精霊が特定の人物を選んで試練を課し、強制的にシャーマンに仕上げるもので、召命型と呼ばれる。②いろいろな理由で個人がシャーマンになることを志し、多くは先輩シャーマンの指導により、学習・修行を続け、一人前になるもので、修行型と呼ばれる」(佐々木宏幹「シャーマン」『文化人類学事典』石川栄吉他編、弘文社、昭和62年、344頁)。
- 2) 「瓢箪のガラガラ」 gourd rattles 音響器具であるが、多くは祭祀用の楽器として使われた。
- 3) マニトウス the Manitous アルゴンキン語で「霊」、「魔」などの超自然力を意味する Manitou の複数形。この部族(メノミニ族)の信仰する精霊には、人間に幸をもたらす天界の善霊と、地下に住んで災いをもたらす悪霊の二通りがあるが、こちらは前者「善霊」の総称である。
- 4) キニキニック kinnikinnick ハゼ、ヤナギなどの干し葉や樹皮の混合物。もと先住民やオハイオ川流域の開拓民がそのまま、または煙草に混ぜて喫用した。
- 5) メノミニ族 the Menomini 東部森林インディアンの一部族。ウイスコンシン川流域に住むが、もとはミシガン湖のグリーン湾にいたと考えられている。言語学的にはアルゴンキン語族*に属し、とくに北部のモンタニエ、及びクリーと近縁関係にある。野生のワイルドライスを主食としてきたため、「ワイルドライスの人々」という意味を持つ、メノミニが部族名となった。狩猟(シカ、カモシカ、クマなど)と採集(ワイルドライス、種子、イチゴの類など)が生業で樹皮製の円錐小屋に住み、男子秘密結社を持つ。1650年の人口は3,000と推定されるが、19世紀には1,600から1,900で、現在は500人以下である。(祖父江孝男「メノミニ」『文化人類学事典』、771頁)。なお、「アルゴンキン語族」に関しては、本稿に先行する、拙訳「北米インディアンの生活(1)——23部族の伝承と習慣——」エルシー・クルー・パーソンズ編著『富山大学人文学部紀要』第26号、1997年3月、訳注(14)、292頁を参照されたい。
- 6) 大砂州村 the Great Sand Bar village グリーン湾から40マイル離れたウイスコンシン川流域の、かつての狩猟場、ウルフ川上流の居留地に移住した現在の主勢力の他に、旧地グリーン湾にそのまま居残ったメノミニのバンドもあった。この青年、若き狼も、そういったバンド(分団)に属するクラン(一門)の一人であり、湾に近い砂州の村からやってきたのである。
- 7) ソーク族 the Sauk メノミニ族と同じく、中部アルゴンキン族に属する森林先住民の一部族。ミシガンから移って現在はアイオワ、オクラホマ、カンザスその他に居住する。原義は「出口の人々」(people of the outlet)の意。ここでは、かつてミシガン湖周辺にいたころ、近隣のグリーン湾に住む、メノミニ族と長い間、確執があったことを示している。
- 8) 前掲、拙訳「北米インディアンの生活(1)」『富山大学人文学部紀要』第26号、訳注(22)、337頁参照。
- 9) メネブス Mānābus メノミニ族の「伝説」上の英雄で、「まじない師の家」の創始者と伝えられる、人間の形をした鬼。
- 10) 「教育期間」The Instruction 本訳注1)で述べた、シャーマン志望者が行う「学習・修行」の一段階に相当し、最後に行われる「加盟式」、「参入式」(The Initiation)の儀式のための準備期間である。
- 11) このメノミニ族の「創世神話」は日本の神話(『古事記』、『日本書紀』)の次のような逸話に酷似している。つまり、本邦では火神カグツチの誕生によって、その母イザナミは陰部の火傷がもとで死んでしまう箇所である。
- 12) 多くの先住民は、まじないの包を持ち、その中に部族の神話的歴史に関係ある事物や物神(トーテム)を保管した。このメノミニ族のまじない袋は動物の皮で作られ、普段は毛布の魔除と一緒に紡錘小屋の梁にぶら下げられていた。
- 13) 「日出る海」the Great Sea where the Dawn Rises 大西洋 the Atlantic Ocean のこと。
- 14) オジブウェイ語 Ojibwa, or Ojibway オジブウェイ族はアルゴンキン語族に属する北米インディアンの一部族でスベリオール湖地方に住み、メキシコ以北最大の部族。チップェア(Chippewa)ともいう。その部族の言語。
- 15) 「呪文打ち込み」"the shooting of the medicine" この「まじない師の家」では、その「教化内容」を

志願者に伝授することを「打ち込み」と言っている。すべて儀式(象徴的行為)を通じて身体で体得させるもので、次の三通りが示されている。①口頭によるもの(伝説・祝詞・歌)②「魔除け」の呪力によるもの③模倣的動作(実際に「相手を打つ」真似をする)によるもの

- 16) 参入式 Initiation 加盟(入)式とも言う。「広義では、ある社会的・宗教的地位から別の地位への変更を認めるための一連の行為を意味する。この際、儀礼を行うのが一般的である。宗教学者のエリアーデ(Milcea Eliade, 1907-86)は、広義のイニシエーションを次の三つに分類する。①少年から成人へ移行させる目的で行われ、社会の成員すべてに義務づけられている集団儀礼的なもの。②秘密結社などへの加入を目的とし、個人的に行われたり、比較的小集団に対して行われるもの。③呪医やシャーマンなどの宗教的職能者の地位の取得のために行われるもの。エリアーデは①を成年式と呼び、他のイニシエーションが社会の全成員に義務づけられていないなどの点で①を②と区別する。そして、②と③は同一のものの二つの変化型とさえみられるほど多くの共通点をもつが、エクスタシー(靈魂が肉体を脱し忘我状態になること)の有無によって区別されるとする。②にはエクスタシーの要素は見られない」(中山和芳「イニシエーション」『文化人類学事典』59-61頁)。とはいうものの、この場合、②と③のどちらに相当するかを決めるのは必ずしも容易ではない。表題の「まじない師の小屋」(the Medicine Lodge)は、当然ながら執筆者がこの「参入式」をシャーマンになるための儀式と受け取っていることになるし、エリアーデも、③に解している(エリアーデ「南・北アメリカのシャーマニズム」『シャーマニズム』——古代的エクスタシー技術、堀一郎訳、冬樹社、昭和49年、400-405頁)。しかし、本訳注4)に見られるように「男性秘密結社」の儀式と見なす研究者も多い。エリアーデの言うように「エクスタシー(脱魂)の有無」を基準にすれば、確かに志願者の若き狼は、一時的に「気を失う」状態にはなり、③を適用するのが妥当になるが、しかし、これは、シャーマンの「天界飛行」や「冥界下降を伴う」ような、明瞭なエクスタシー、というほどの体験ではない。そうなれば②の秘密結社への参入式と取らざるを得ないのである。
- 17) スエット・バス Sweat bath 前掲の拙訳「北米インディアンの生活(1)」『富山大学人文学部紀要』第26号、訳注(36)、pp.337-338 参照。
- 18) 原文(英訳)は次の通り。
 "I am preparing the thing that was hung [the little seed]
 And that which was hung shall fall"
- 19) 「新入りを打つ」"Shooting the New Member" 15) で述べたように志願者がシャーマンとして獲得すべき事柄は、太鼓の伴奏とともに歌によっても伝授される。これは、その呪文めいた歌の題名。
- 20) 原文は次の通り。
 "I pass through them! I pass through even the cheif."
- 21) 原文は次の通り。
 "Ye God that take invisible though ye be beneath us"
- 22) 原文は次の通り。
 "you my brethren. I pass my hand over you, I thank you."
- 23) オト Oto (Otoe) もとネブラスカ州東部に住んだスー族の支族。今はオクラホマ州に住む。
- 24) アランソン・スキナー Alanson Skinner 生没年不詳。原著の分担執筆者。人類学博士。「メノミニ族の社会生活および魔術の包み」("Social Life and Ceremonial Bundles of the Menomini Indians", in the *Anthropological Papers the American Museum of Natural History*, Vol. X II) など、同書所収のメノミニ族に関する五編の論文がある。
- 25) ウィニベゴ族 Winnebago メノミニやフォックスと同じ東部森林インディアンの一部族。ウイスコンシン州の五大湖の近くにいたが、現在はネブラスカ、ウイスコンシンに住み、言語学的にはスー語族に属する。メノミニとは友好関係にあるが、フォックスとはしばしば敵対した。部族名は「汚い水の人々」という意味のフォックス・インディアン語から来ている。狩猟(野牛、オオシカ)と農耕(ワイルドライス、トウモロコシ、豆、カボチャ)が生業、住居は樹皮製円錐型小屋(ウイグワム)。男は皮製のシャツに下帯、脚はん、モカシン(やわらかい皮製の平底靴)。女は皮製の巻きスカートで冬は上衣をつける。外婚の半族を持ち、父系性で動物のトーテムを所有する。1650年の人口は3,800であったが、1937年には2,700で現在は1,000から2,000と推定される。(祖父江孝男「ウィニベゴ」『文化人類学事典』P.81)
- 26) 舞踏小屋 the dancing lodge 先住民が medicine dance (病気を払うまじない踊り)を行う場所。

- 27) 瓢箪 gourd 祭祀用のガラガラのこと。訳注2) 参照。
- 28) 薬師 extractor of pain 医者のこと。medicine man (まじない師、呪医) に同じ。なお、前掲エリーアーデ『シャーマニズム』405-406 頁参照。
- 29) ポール・ラディン Paul Radin (1883-1959) アメリカの人類学者。ポーランドで生まれたが、ニューヨークで育ち、ニューヨーク市立大学に学ぶ。ドイツ、フランス、イタリアの大学院で過ごした後、コロンビア大学ボアズ (F. Boas) について人類学を学び、ここで博士号を取得した。大学院時代から晩年まで一貫してウィニベゴ・インディアン民族学的、言語学的調査を行ったが、とくに宗教と神話の研究に焦点が当てられている。(中略) ウィニベゴの資料から出発してひろく無文字社会の宗教を概観した『原始宗教』(1937 年) は最も知られており、またウィニベゴのトリック・スター物語のテキストをかかげてこれに分析を加えた『トリックスター』(1956 年) も注目されている(祖父江孝男「ラディン」『文化人類学事典』、810 頁)。
- 30) メスクワキ族 Meskwaki アイオワ州、タマ近郊に居住する。1922 年当時で、人口約 350 人。公表では全員が純粋のメスクワキであるが、実質的には、旧フランス系、旧イギリス系の白人との混血が多く、19 世紀後半には既に純血の部族員は完全に消滅していたものと見られる。記録上では、メスクワキはミシシッピ河畔のソークやフォックスとして登録されているが、しかしこれは、連邦政府がかなり前に制度的に両部族を合併させてしまったからで、実際には今日でさえ、言語的、部族的、神話的にもはっきり異なっている。フォックスというのは、メスクワキ・インディアンを示す多数の同義語の一つに過ぎないのである。彼らのもともとの呼称は、メ スグウエ ア キ ア キ (me sgw A ki A ki) で、“赤い大地”(Red-Earths) の意。言語的には、ソーク、キッカプーに最も近く、ショウニー、さらにはメイン州、カナダ各地で近接するペノブスコット、マレサイトとはやや遠い。クリーやメノミニとも比較的近い。文化的には、メスクワキ、ソーク、フォックス、キッカプーは互いに親しく、平原部族としての特徴も併せ持つが、主として森林インディアンとしての特徴が強い。近接のスー族とも親密である。
- 31) トルーマン・マイケルソン Truman Michelson 生没年不詳。アメリカの人類学者。原著の分担執筆。メスクワキ族に関する以下の論文がある。Michelson, Truman. “Preliminary report on the linguistic classification of Algonquian Tribes”, 28th Annual Report of the Bureau of American Ethnology, pp.221-290 b [1912]), “The Owl Sacred Pack of the Fox Indians”, Bulletin 72, Bureau of American Ethnology, Washington, 1921
 なお、以下の雑誌に掲載されたメスクワキ族に関する文献目録もマイケルソンの手によるものである。
Journal of the Washington Academy of Sciences, vol. I X, pp.485, 593-596
- 32) モンタニエ地方 Montagnais Country 文献上モンタニエとして知られているアルゴンキン語族の先住民は、次の三つの地域、大西洋のラブラドル海岸からセント・ローレンス川北にかけての地域、西はケベックに近いセント・モーリス川まで、さらに北は、北極圏とセント・ローレンス川の水系を分かつ高地までにわたる、領域に居住している。人口は約 3,000 人であるが、彼らはいくつかの方言的、血縁的に異なる集団、すなわちバンドを形成して、この広大な領域に散在する。ある一定の限界内を移動し、主として狩猟と漁労によって生活する。かつてイロクオイ族に抵抗したことはあるが、戦争は好まず、大人しくまた秩序を尊ぶ。17 世紀初め、イエズス会の宣教師が訪れて、彼らの生活様式に関する唯一の記録を残している。その文化は、きわめて素朴であり、社会的、政治的、儀礼的な面では、ほとんど不毛と言ってもよいが、狩猟、漁労、移動に関する活動は豊かである。一般的には先述したように、多少の無理はあるが、血縁的、方言的な面から、このモンタニエ族を次の三つの集団に分けることができる。すなわち、海岸部(もっとも典型的なモンタニエ)、ラブラドル半島の北西部に当たる内陸部、および北東の内陸部である。一番最後の集団は東部ナスカピという名で知られている。彼らはみなハドソン湾のクリー族と密接な関係をもっているが、それ以外の地域では、ニューハンプシャーからニューファンドランドにかけてのセント・ローレンス川南岸の、ワバナキ族と次に親しい間柄にある。
- 33) 大湖 a great lake 北米大陸の中でも特に大小無数の湖が点在している、この地方にあって最も大きいのは、Lake John (ヨハネ湖) である。しかし、これが果して文中の「大湖」のことであるのかどうかは、断言できない。
- 34) ハドソン湾 the Hudson Bay カナダにある巨大な湾。北アメリカ大陸北東部にあり、ハドソン海峡を経て北極海へ通じる。南部のジェイムズ湾を含め面積 121 万キロメートル。最大深度約 450 メートル。冬季は全面結氷する。周辺は北極熊の生息地。1610 年イギリスの探検家 H・ハドソンが発見した。

沿岸部一帯は、1713年のユトレヒト条約以降イギリスの特許会社ハドソン湾会社の領有地となり、毛皮獣捕獲や森林開発が進められた。1869年カナダ領となり、1929年には内陸部の穀倉地帯からハドソン湾鉄道が西岸のチャーチルまで通じ、31年に初めてここからヨーロッパに向けて貨物が船で輸出された。東岸には少数のエスキモー部落がある。現在、沿岸最大の町はチャーチル。(『世界大百科事典』平凡社、1990)

ハドソン湾会社 Hudson's Bay Company 北アメリカの毛皮取引と、その本国への輸出を目的として1670年に設立されたイギリスの特許会社。フランスの植民地勢力と対抗しつつ、毛皮資源の豊富なハドソン湾岸からスベリオール湖北西にいたる広大な地域を領有し(外交上は1713年のユトレヒト条約以降)、カナダ貿易を事実上独占した。ついでオレゴン地方では、毛皮取引を行っていた北西会社と競い合ったのち、1821年同社を合併してこの地方に進出、積極的な移民誘致策により西部開拓に一役買った。69年、同社はいっさいの権益をカナダ政府に委譲したが、その後もカナダ貿易の中心的存在であった(『同上、同頁』)。

- 35) フランク・G・スベック Frank G. Speck 生没年不詳。元ペンシルヴァニア大学人類学教授。原著の分担執筆者。
- 36) イロクォイ族 the Iroquois. 17世紀初頭には現在のニューヨーク州に当たるハドソン河畔からエリー湖にまで広大な領域を支配した有力な先住民の部族。言語学的にはイロクォイ語族に属す。“まことのマムシども”という意味のかれらのことばをフランス人がIroqとちぢめて、これにフランス語の語尾のoisをつけてイロコワと呼んだが、後にこれを英語読みにするにいたったもの。その中にはセネカ(Seneca)、カユーガ(Cayuga)、オノンダガ(Onondaga)、オナイダ(Oneida)、モホーク(Mohawk)の5支族に分かれ、相互間の戦闘が絶えなかったため、1570年頃からあとの時期に相互間の平和条約を結んでイロクォイ5部族連合(League of Five Nations)を作り、1722年頃にはイロクォイの支族ではないが、文化的に近縁関係にあるタスカローラも加わって6部族連合となった。好戦的だが文化の程度は高い。独立戦争後は大部分がカナダに移住し、今はニューヨーク州とウィスコン州に残存している。モーガン(Lewis Henry Morgan)の『イロクォイ連盟』(League of the Ho-De-No-Nee or Iroquois, 1851)によってその実態がよく知られるようになった。
- 37) 「大緑穀祭」the great Green Corn Festival. 「ここ(イロクォイ)の農耕生活も、狩猟とは違った周期で動く必要があった。動物の移動による狩人の二つのシーズンは、植物の成長段階にもとづく六つの定期的な祭り——カエデの樹液(重要な食品)の上昇を祝って春に催されるカエデ祭り、種への恵みを求める種蒔祭り、最初の野生果実に感謝を捧げる野イチゴ祭り、トウモロコシと豆と小型南瓜の熟れたのを祝う緑穀祭、収穫祭、真冬祭りあるいは新年祭り——に取って代わられた」(C. パートランド著・松田幸雄訳『アメリカ・インディアン神話』青土社、1990、113頁)。
- 38) 「長い家」the Long House. 太平洋諸島や、イロクォイ族を初めとする北アメリカ東部樹林地帯の農耕を主とする先住民が住んだ共同長屋。「ときには15あるいは20フィート(4ないし6メートル)の高さ、底辺で6フィートの幅をもつ、一列の弧状に組み立てられた、曲げた若木の枠組みで構築されていた。この弧状の構造は、風雨を凌ぐ屋根を造るために樺と楡の樹皮のシートで覆われた。幕が共同長屋の内部を分割して家族別の部屋とし、それぞれは個別に炉と屋根に煙出口をもっていた。大きな村はそれぞれが100フィートもの長さがある共同長屋を3軒とか4軒とか構えていた」(C. パートランド著・松田幸雄訳『アメリカ・インディアン神話』、105頁)。イロクォイ族は別名「長い家の人々」とも言われた。
- 39) 訳注37) 参照。
- 40) 小人たち Pigmies. 「イロクォイ族は伝説の中で巨人族と同様に、小人族の存在を想像していた。それはゲルマン民族の『ノーム』(地中の宝を守る地の精で、しなびた醜い老人姿の小人)とよく似た性格を持っている。彼らは地上を美しくするのを使命の一つにしており、地を彫り、崖や岩などを刻んだりするが、また雷神のように、太古、地上にはびこっていた無数の怪物から人間を守ってくれた」(Lewis Spence, *The Myths of the North American Indians*, Dover Publications, Inc., New York, 1989, P.229)
- 41) 訳注36) 参照。
- 42) デガナウイダ Deganawida (or Dekanewidah) ハイアワーサの計画に賛成し、イロクォイ連合を成立させた、モホークの酋長。
- 43) ハイアワーサ Hayenhwahtha (or Haiawatha) 「もともとはオノンダガの出身でその戦士の一人

であったと伝えられる。1560年頃、アルゴンキン、ついでヒューロン族との間に抗争が勃発、以来長い戦争が続いたが、この両部族との全面对決を恐れた彼は、大酋長アトタルホ (Atotarho) に、基本的には言語を同じくしながら、常時戦ってばかりいる近縁の五部族の団結の必要を説き、平和条約の締結を進言したが受け入れられなかった。自国を出たハイアワサは、モホーク族に加わり、デガナウイダの賛成を得た後、オノンダガにも働きかけて一年後、連合を実現させた。1570年頃のことと言われる。しかし、彼が目指した大連合案は、単なる五部族間の平和のみでなく、「地上のあらゆる国家間」に平和を達成しようという、高邁な理想に満ちたものだった、とも言われる。なお、ロングフェロー (Henry Wadsworth Longfellow, 1802-82) の叙事詩『ハイアワサ』 (*The Song of Hiawatha*, 1855) の同名の主人公はこの人物とは全く関係がなく、スクールクラフト (Henry R. Schoolcraft, 1793-1864) の著作『合衆国におけるインディアン諸部族の歴史的統計的調査報告』全六巻 (1851-57) に習い、この歴史上の人物、ハイアワサと、アルゴンキン語族オジブエ族の伝説的な英雄マナボジョ (Manabozho) とを、わざと混同してしまったに過ぎない (Lewis Spencer, *The Myths of the North American Indian*, PP.223-228)

- 44) 「豆祭り」 Bean Feast 訳注 37) で触れたように「緑穀祭」の一環でトウモロコシの刈入れとほぼ同じ時期に行われる祭り。
- 45) 「仮面組」 (False Faces) 儀式の際に悪霊退散のため、奇怪な顔付きの木製の小仮面を被って荒々しい振舞いをするイロクォイ族の演技者の集団。仮面は木製のほか、トウモロコシの殻の編組の輪で作ったものもあった (C. パートランド『アメリカ・インディアン神話』114-115頁)。
- 46) イロクォイ連合には「各部族からの氏族長が代議員として毎夏、会議に参加して採決も行ったが、代議員の数はセネカから8名、オランダから14名等々と部族毎に決められていた。なおこの氏族長は、各氏族の男性の中から選ばれたが、選ぶのは、それぞれの氏族の女性だけの会議においてであり、また女性のみが氏族長のリコール権を持っていた。北米インディアンの中でこのような組織化された制度を持つのはここだけであった」 (祖父江孝男『イロクォイ』『文化人類学事典』、71頁)。
- 47) 「戦時酋長」 Chief Warrior 「イロクォイ族は伝統的に二種の首 (酋) 長職をもっていた。白人や他部族との交渉や協定、紛争の裁定、祝祭や歌舞、競技の開催など日常活動を司る文民首長 (シヴィル・チーフ) と戦争の全体的な指揮を司る戦時首長である。いずれの地位も世襲性で特定のクランから選ばれた」 (エドモンド・ウィルソン著・村山優子訳『イロクォイ族の戦い』381頁)。従ってここでは、良報は文民酋長としてスー族との協定に当たり、秘密の「和平条約」を結んだのであろう。
- 48) アレグザンダー・A・ゴールドンワイザー Alexander A. Goldenweiser 生没年不詳。原書の分担執筆。
- 49) レナピ族 the Lenapes. レナピもしくはデラウエア族。「東部森林インディアンの一部族で、ニュー・ジャージー、ロングアイランド、マンハッタン、ニューヨーク、ペンシルヴァニア、デラウエアに居住して狩猟 (ムース、カリブー、その他の小動物)、採集 (種子、野イチゴ、コケ類) を生業とした。言語的にはアルゴンキン語族に属す。ヴァージニア州第2代知事デラウエアの名を取ったデラウエア川上流にいたので、この名がついた。アルゴンキン語族の中で最も歴史が古く、諸族の祖と呼ばれる。1682年に白人側と結んだ土地協定は、合衆国とインディアン諸族の間に成立した370の協定の第1号となったが、協定は守られず、かれらは次々に土地を追われて最後にはオクラホマの指定居住区に入れられた。1600年の人口は8,000余と推定されるが、1937年には140、現在は100人足らずがオクラホマとカナダに住む」 (祖父江孝男『デラウエア』『文化人類学事典』P.504)
- 50) メングエ Mengwe. 東部森林インディアンの一部族で、近隣のレナベ族に敵対する部族。
- 51) ショウニ Shaunees レナピ族と同じアルゴンキン語族に属する東部森林地帯の一部族。チェロキー族とともに、かつて紀元前1700年から1000年にかけては東部森林地帯に属するミシシッピ流域に、独特のマウンド (塚) と言われる土の構造物を中心とする文化を築き上げた先住民、「マウンド・ビルダー」であったとされる。(Lewis Spence, *The Myths of the North American Indians*, PP.20-21. および富田虎男『アメリカン・インディアンの歴史』雄山閣、平成6年、27頁参照。)
- 52) 「我々ウナミ族」 (our Unami tribe) レナピあるいはデラウエア族は、白人によって最初に「発見」された当時は、主力のウナミあるいはデラウエアに加え、ウナラチティゴ (Unalachtigo) あるいはウナラトッコ (Unalatko)、さらにミンシ (Minsi) あるいはムンシー (Muncey) の三部族からなる、緊密な連合体を形成していた。
- 53) 原文 (英訳) では次の通り。

In my trouble
In my trouble
I call upon my Helper
And his answer
Out of a dark sky
It comes rumbling,
It comes rumbling!

54) ミンシ族 the Minsi. 訳注 52) 参照。

55) モヒカン族 the Mohican (or Mohegans) アルゴンキン語族に属し、レナピとは友好関係にある東部森林地帯の一部族。ヒューロン、チェロキーなどと共に、近隣のイロクォイ連合によって滅ぼされた。なおクーパー (James F. Cooper, 1789-1851) の5部作「革脚絆物語」の二番目「モヒカン族の最後の者」(*The Last of Mohicans*, 1862) は、英仏植民地戦争に巻き込まれて衰退していく、この東部森林地帯の諸部族、デラウエア、ヒューロン、イロクォイの葛藤を描いたロマンスである。

56) サスケハノック the Sasquehannocks 東部森林インディアンで、レナピ族と敵対する近隣の一部族。

57) M.R. ハリングトン M.R. Harrington 生没年不詳。人類学者。原書の分担執筆者。「デラウエア族の風習」"Some Customs of Delaware Indians", *Museum Journal of the Museum of the University of Pennsylvania*, Vol. I. No.3 他、デラウエア族に関する6編の著作がある。

付記：本稿は、「北米インディアンの生活 (1) —— 23 部族の伝承と習慣 ——」【富山第学人文学部紀要】第26号 (1997年3月) の続篇である。

また、本訳中、V—1 若き狼「まじない師の家に入る」、V—2 揺れる花、イロクォイ族の女、V—3 ゴロゴロ翼の雷電力の三章は、拙著：日米文学の中の「生」と「死」—— アニミズムの復権 (近代文芸社、1998) の第二部・翻訳：「アメリカ先住民の生活と宗教」の第四、五、六章に収録した内容と重複することを付け加えておく。

なお、参考文献は最終稿にまとめて掲載する予定。